
arme

ふぁ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a r m e

【Nコード】

N 2 5 4 5 C

【作者名】

ふあ

【あらすじ】

六十年目を迎えた世界大戦のさなか。その国の誇る、ロボット工学の粋を集めて造られた人型戦闘ロボット、通称a r m e。冷たい雨の中、生み出されるのは喪失と絶望。それぞれの悲しみ。届かない叫び。その声を聞く者はいなかった。その涙に触れる者は、いなかった。

chapter 1 - 1

暗闇の中に見える光の筋。

休みなく伝わり続ける小さな振動。

誰一人言葉を発しないトラックの荷台。

石を踏み潰し跳ね上がる車体。

かすかな砂のにおい。

舗装されていない乾いた地面。

地面を走り続けるトラック。

トラックの両側にある廃墟。

廃墟の向こうにある、夕陽。

乾いた大地に一台のトラックが停車し、すぐに道の先へと発進した。

その廃墟となった地に降り立った彼は、車体の影が遠ざかると同時に、建物の立ち並ぶ場所へと走りこむ。身体を伏せる様に曲げて、それでいて全力で走る様子は街中ではいささか怪しまれるものだが、この地を背景にするとあまりにも彼の姿は似合いすぎていた。

国軍正規の紺色の軍服を着て、両手に固く長銃を握り、テンポを崩さずに走り続ける。ヘルメットの下で前を睨みつけるその表情はまだ若い。

国境の地としてそれなりににぎわっていたこの街も、数年前に襲撃されて以来造り直されることはなく、廃屋が立ち並び野犬がうろつく場所となった。崩れた家屋の瓦礫が散らばり、あたり一面遠慮なく散らばっている。壁の一部を破壊されて、それでも立っている

ビルやマンションだった建物は、残された壁にいくつもの弾痕を抱えている。窓だった部分には真つ暗な口がぼっかり開き、すでにガラスなど一枚も存在しない。通路だった地面には、崩れた建物の壁などの瓦礫があちこちに突き刺さり、それ以外の細かいものが、通行の著しい邪魔をする。いくつかの車が、打ち捨てられ砂礫をかぶっていた。

街は、これほど荒れているにもかかわらず、不気味なほど静かだった。猫一匹おらず、鳥の声すら聞こえない。

ようやく彼は足を止め、一つの廃ビルの壁に背をつけた。一度ゆっくりと息を吐き、夜が近づいているはずなのに尚も気温の低下を許さない夕陽を忌々しく思う。額から伝い下りた一滴の汗が、乾いた地面に小さな黒いシミをつくった。息を吸い込むと同時に、後ろを振り向く。ちゃんとしてきている。ついてこないはずはないのだが、彼はもう一度安堵のため息をついた。

一つの人影が、隣にいる人物を見上げて直立している。その影は、隣に立つ軍服の兵士よりも更に若い、十代半ばほどの少年だった。その見た目はとてもこの場に似つかわしくなく、長ズボンをはいているが、上は肘までの半袖でヘルメットすらしておらず、銃も持っていない。とても同じ場所にいるとは思えない二人だが、現実には、一メートルほど距離を置いただけの同じ場所にいるのだ。

「B - 6ポイント、到着」

長銃を右手で持ち、無線機を左手で持つて呟く。それを胸ポケットに戻すと、別のポケットから取り出したインカムをつけた。右耳のほうにだけイヤホンがついており、そこから延びた針金入りの導線が首の後ろを廻って口元まで続き、その先に小さなマイクが着いている。止まってからの動きは三十秒にも満たなかったが、導線のゆがみを直し、まだスイッチも入れていないところに、無線機からの雑音が響いた。

その音はすぐに止んだ。後ろを振り向く。さっきと変わらない様子で、こちらを見上げる無気力な赤い瞳と目が合った。

「いいか、生存者の発見と救出が目的だ。やられるなよ」

それだけ言つて、壁の端で片膝を折つてしゃがんだ。砂を濃く含んだ風が顔に触れる。その上熱風だ、息苦しい。

次の瞬間、彼は壁の向こうへ身を乗り出し、同時に照準を合わせる。道の先、向こうにある建物の窓に見える一つの影と一つの銃口。灰色の軍服。敵だ。

側の地面が弾けた。それには目もくれず、

「行け！」

と叫ぶと同時に指に力を込めた。

近くを一つの影が駆けて行き、遠くの一つの影が、くずおれる。

両側を廃墟に挟まれた荒れ果てた通路を、足が許す限りの速さで、少年は走った。

銀色の髪を夕陽で赤く染め、赤い瞳でひたすら前を見つめる。数回、足元の土や瓦礫が鉛玉に貫かれて弾け跳んだが、走りぬく標的に当てられるほどの技術を持つ者はその場にはいないようだった。数打てば当たると言うが、そう数を重ねる前に、彼は一つの建物の入り口を通過した。太陽の光が遮られ、一気に周囲は暗くなる。

その建物は、元はどこかの会社の事務所だったようで、そばにある受付の台が崩れた天井に潰されている。

そこを少し速度を落として走りぬけ、奥にある階段を上る。二階へ到達し、更に三階へ続いているようだがそこで一度止まった。その先にある廊下は静まり返り、両側に並ぶ部屋は扉が外れ、折れた机やガラスが夕陽に照らされて床に散らばっていた。廊下を突き当りまで進んだが、だれもいないようだ。突き当たりにある階段は、踊り場から上の部分が、片側の壁や陥没した天井で潰れている。

しかし、通れないわけではない。コンクリートは今も十分その丈夫さを残しており、崩れることのなさそうな足場を選択し、その上を乗り越えた。普通に階段を上る二倍ほどの時間をかけて、最上階である三階の廊下にたどり着いた。

そこは階下よりもいくらかは片付いており、部屋のいくつかにはまだちゃんと扉がついていた。それでも、廊下にはガラスが飛び散り、開け放たれた部屋からは瓦礫や本などが流れ出ている。

廊下の長さは二階の半分ほどしかなく、突き当たりに扉のついた部屋が一つあった。両サイドの部屋にはネズミ一匹おらず、必然的にその部屋にたどり着く。

取っ手を下げて押すと、簡単に開いた。鍵は壊れているようだった。

狭い部屋の中には十代後半ほどの年の青年がいて、ものすごく驚いた顔をしたまま、手に持った拳銃を上げることもできずに振り向いた。服装や行動から見て、明らかに敵の兵士ではない。

「生存者一名、確認」

そう呟くと、

「よし、他にいるか？」

一番最後に聞いた人間の声で、返ってきた。それに対応する言葉を発しようとしたとき、

「誰だ、お前は」

いくぶん平静さを取り戻したからなのか、相手が限りなく一般人に近いからか、自分より年下のようなだと余裕が出来たからなのか、部屋の向こうに対峙している青年が口を開いた。下には向けているが、両手で銃を握り締めている。

少年は黙って腕を上げ、服の右袖を見せた。群青色に緑色の刺繍は見えにくいと、大変評判は悪いのだが、幸いにも彼はこの意味を汲み取ってくれたようだ。

「軍部……軍のシンボルマーク」

嘘だろ？と青年が言う前に聞いた。

「他に生存者は」

「え、いや……いない。ここにいるのは俺だけのはずだ」

いない、という報告を受けて、

「そうか。なら、早く戻って来い。死なすなよ」

と、またすぐに返事があった。了解、と返し、元の場所に戻るまでの最短距離を算出する。さっきの潰れた階段だと時間がかかる。それならば、青年の後ろ側の壁にあるドアを抜けた方が速いだろう。その先にも階段があるはずだ。

そう結果を出し、そのドアに触れ、かかっていた鍵を開ける。

「これから街を出るから付い……」

「付いてけばいいんだろ？」

青年はそう先に言って、見下ろした。背は高い。180センチに

幾分足りない程。もしこれで軍服を着ていたら軍人だと言われても、あまり見た目に違和感はないだろう。ただ、明らかに不審そうな顔をしている。

「お前軍人なのか、嘘だろ？銃とかなんか持ってたのかよ」

確かに疑われても仕方ないが、彼は素直に、ないと答えた。

呆れ果て、それ以上言葉が続かないようだった。軍部の刺繍の入った布は、例え非公式のルートを使っても、手に入れることは難しい。処分されるものでも、集めて軍部内で処理される。最も使われるルートは、戦場で戦死した兵士から奪うことだが、流石にそこまでする人は滅多にいない。青年が彼に持つほんの僅かな信用は、その刺繍のみである。

「ひとつだけ」

「何だよ」

「その銃は、撃たれても使うな」

そう言うのと、呆れに、何か怒りのような感情が滲んだ。

「何言ってるんだよ、勝手だろ。撃たれて撃ち返さねえなんてやられるに決まってるんだろ！」

そう怒鳴るがその勢いには全く動じず、自分が握っている銃の筒を少年が右手で握り締めるのを見て、畏怖と嘲笑を織り交ぜた声で、
「何だよ、貸せてか？」

そう聞くと、彼は首を横に振った。

「壊す」

「ふざけんな！」

その手を振りほどき、明らかに敵意を持って睨みつける。撃たれても使うなという意味が分からない。一体こいつはどういうつもりなんだ。やられっ放しじゃ死ぬに決まってる。もう何から言えいいのか分からないので、青年は黙って睨みつけた。

このままこうしていても仕方がない、と少年は考えた。無理矢理奪い取って窓から投げ捨ててもいいが、そうなるまでが非常に危険だ。ものすごく抵抗するだろう。それに、あと数十分で陽が暮れる。

夜の方が昼間よりも人にとって行動しづらいのは間違いない。

何より、ここから早くでたほうがいいと少年は判断した。

もう一度約束させようとするが、やはり無理だった。時間が無駄になり、敵意が増すだけだった。

開けられた扉の向こうは割と広い空間で、たくさんの机が並んでいる。昔はここでさまざまな人が仕事をしていたのだろうが、今はその机は碎かれ、蛍光灯の破片が飛び散り、足跡のついた書類がちこちに跳び散らかっている。

いくらか暗さが増したが、相変わらずの静けさだ。こんなに人のいるべき席はあるのに、肝心の人間が、いない。

幸いその先の階段は崩れることなく残っており、一階までたどり着いた。そこから、入ってきた出入り口へ出ることは出来るのだが、陽が暮れかかった正面の大通りを通るより、裏口を使った方が安全だろう。この建物の外を通ったとき、側面にもう一つの扉があつたのを視認していた。

階段脇の分厚い扉をゆっくりと開ける。この部屋の先に裏口は位置しているはずである。

閉まりかけた扉が鉛玉をはね返し、澄んだ金属の音が響いた。次の瞬間、その音がいくつも連なり、静かな虚空に広がっていった。

すぐさま床に伏せ、最も近くにある机の影に二人は座り込んだ。金属の音はすぐに止み、再び静けさが辺りに充満した。弾が飛んできた位置からして、相手がいるのは二列に向かい合って並んだ机の一番向こう。こちらも端にいたのでつまり、最も離れた場所。裏口も向こうにあるので、相手をどうにかしなければいけない。

ときおり、そこかしこで床や机が乾いた音を立てる。どうやらこちらの正確な位置は分からないらしい。ここから向こうまで直線距離で二十歩もないだろう。机の影になる場所を進めば、一番問題が少ない筈だ。弾道をたどれば、相手の場所にまず間違いなくたどり着く。

すぐ横を、弾丸が通り過ぎた。

「つつ……」

青年の足をそれがかすめ、薄く血が布地に滲む。

銃口が向こうを向いた。

少年がそれを叩き落そうとするより速く、引き金が引かれた。乾いた音が空気を振動させる。

その弾が向こうに発信源を知らせる前に、彼は自分が背を向けていた机に跳び乗り、蹴った。連なっている机の上に散らかっている天井の破片や資料が踏まれ、紙が宙を舞った。

二歩踏み出したとき、相手が先程よりも長く、黒い機械を手にしていることに気が付く。短機関銃、俗に言うサブマシンガン。引き金を引き続ける限り、一秒間に十発以上の弾が発射される、武器だ。一発ずつの貫通力は高くないが、こんな普通の事務所ではどこに隠れていても隠れきれない。狙われれば終わりだろう。

その銃口は、少年を通し、先ほどまで彼が隠れていた机の列の端に向いている。こんな物が相手では、プラスチック製の事務机など跡形もなくなってしまう。

踏み出して三歩目。引き金に指がかかった。三歩半で、引かれる。向こうまで残り十三歩で、始めの弾丸が、前に突き出した彼の右腕を引き裂いた。残り九歩で、腕中の皮膚がぼろぼろに裂ける。

六歩半で、相手の顔が驚愕に引きつった。右腕のネジがいくつか机の上に転がり落ちる。

残り三歩で、腕の形をとっている金属が、指まで姿を現した。鈍い金属光沢を放っている。

次の瞬間には、相手の銃口を抑える十分な距離にいた。下からその銃口を右手で握り、無理矢理ねじ曲げる。パキ、と音がして金属の破片が飛んだが、きつとあれは腕の方だろう。筒の潰れた銃が、床に落ちる。

「まさか……」

相手が目を大きく見開いたまま、水分の不足した声を出した。そ

の声と重なって、モーターの動く音が誰にも聞こえないほど微かに鳴って、彼の腕の肘から手首までを構成しているものの一つが、そこから十五度だけ上に持ち上がる。切るよりも刺すことに優れている先の尖った刃が、恐ろしい程静かに、鋭く光る。

息をのむ音がこだまし、その音を出したばかりの喉に刃が突き刺さった。首の後ろまで貫通したそれが抜けるころには、人だったものは人でないただのものになり、赤い血を撒きながらそれは床に伏せた。

再び、静けさが全てを包み込んだ。

chapter 1 - 2 (後書き)

私のうっかりミスで、書き溜めてた続きが全て消滅してしまいました。ショックが大きすぎて更新は大分先になりそうです。すみません。

chapter 2 - 1

絶え間なく響く轟音。

音と一緒に倒れる影。

誰かが呟いた誰かの名前。

その人間の最後の言葉。

最後の言葉を、受け止める者はいない。

灰色の空の下で響く泣き声。

泣き声を上げる人が流す涙。

涙で濡れていく地面。

地面にたまる、赤い血と透明な水。

みんなで連れ立って歩くのは、楽しいけど、今は全然楽しくない。
とっても不安で、ときどきする。

どうか生きていてください。昨日からずっとお祈りしてるけど、
誰か聞いてくれたかな、神様なんていないって、知ってるけど。

「まだ子どもなんだから」「危ないから駄目だよ」って大人たちは
言っただけど、必死で頼んでなんとか許してもらえた。私なんて何
の力にもならないけど、じっとしてるのに耐えられなかったんだ。
家族になるって言うてくれた人なのに。もう失うのはいやだ。

「大丈夫？」

横にいる友達に聞かれ、なんとか笑って頷けた。その子も不安そう
だから、手を握ると、恥ずかしそうに笑ってくれた。

「いいか、絶対はぐれるなよ。それから大人の見える位置にいてこ
と、危ないところには行かないこと、いいな」

私達は、前に行く男の人にそろって返事をした。

歩いて行く地面は固くて、乾燥している空気はすごく砂っぽい。

ここしばらく雨も降ってないからかな、でも、空は見渡す限り灰色で、雨は降ってもおかしくないみたい。だんだん、横に並んでいた家は少なくなるけど、早足であっちこっち駆けて行く人は増えてきて、深い青色の服の軍人さんも増えてきた。道端に、なんだか見たことある、長い銃が落ちていたけど、みんなあまり興味はないみたい。だって、見たくなくても、いつでも見られるから。

「まだ残党がいるって話ですよ。まあ、今更なに信じていいか分かりやしませんけどね。でも、気をつけるに越した事はありませんから、特に子どもは」

私だけに言われたわけじゃないけど、居心地が悪くなって、視線を落としてしまった。

そう教えてくれたその人は、忙しそうに私たちと逆の方向へ走っていた。

瓦礫だらけのそこにはたくさん人がいて、怪我をしてる人たちを助けにまわっていた。あっちこちで大声が響いたり、血だらけの人を潰れた建物の中から引っ張り出している。

近くで悲鳴のような泣き声が聞こえた。そこには、頭から血を流して、片足が潰れてしまった人が横になっていて、その側に膝をついた女の人が泣いていた。

すごく怖くなった。これ以上はないって思ってたけど、もっともつと怖くなった。

私の左手を握る友だちが、手にぎゅっと力を入れた。とっても真剣な顔でその人たちを見ていて、私も更に力を入れて握り締めた。

本当の偶然だったのに。ここまで来ることは滅多にないのに、それが、おとといの、こんな事になる日と重なるなんて。

どうか。どうかみんな無事でいてください。

散らばってもいいって言われて、私は助けられた人たちが治療してもらってる場所に行く。もしかしたら、もうあの人は助けてもら

つてるかもしれない。

いっぱい人がいて、怪我をしてる人が殆どで、地面は真っ赤だった。知ってる人を見つけようとして人ごみの中に入った。

だけど、私は小さすぎるから、なかなか見えないみたい。邪魔だつて怒鳴られて、ぶつかつて、転んでしまった。膝をすりむいた。泣きたくなる。痛いからじゃなくて、何も出来ないのがくやしい。知っている人がいなくて、怖い。

「カヤ」

私の名前が聞こえる。

近くのベンチ代わりの台に座っている女の人が、驚いたように私の顔を覗き込む。私もびっくりして、その人を見上げる。

「来てくれたの」

頷いたら、ぎゅっと抱きしめられた。温かくて、ほっとして、嬉しくて、私もぎゅっと抱きつく。今度は安心で、泣きそう。

「けがは、けがはしてない？」

まず知りたかったことを聞くと、笑って、だいじょうぶだつて言ってくれた。でも、その頭に白い包帯を巻いてる。うっすら血が滲んでいる。痛そう。

悲しくなつた私のほつぺたに優しく触って、微笑んでくれた。もう一度私は、強く抱きついた。

「ほかの人は、どこにいるの」

そう聞いたら、あと見つかつてないのは三人だけど、見つかった人は全員無事だつて教えてくれた。見つかった人の中に、家族だつて言ってくれたあの人はいない。

探さなきゃ。探しに行かなきゃ。

心配してくれたけど、私はそこから離れる。だつて、見つけなきゃ。早く、早く見つけなきゃ。

人が集まっているところには全部行つたけど、いない。助けられた人の顔もみんな確かめたけど、いない。

怖い。怖くて怖くてつぶれそう。

だから走る。全部の場所を確かめに行く。

たくさん瓦礫を越えて、崩れかけた建物の中も覗いて、その度に悲しくなつて、また走る。

気が付くと、近くには誰もいなくなっていた。大人も、子どもも見当たらない。冷たい、崩れかけた建物ばかりで、すごく静かで、だれの声も聞こえない。だれもいない。

遠くまで来ちゃった。戻らなきゃ。

でも、まだ見つけてない。この先にいるかもしれない。もう少し先で、待つてるかもしれない。すごく足が痛くなってる。がたがたの上を、ずっと走ってたから。

頭に何かが当たった。見下ろした足元の土が、ほんの一箇所だけ薄い茶色から濃い茶色に変わってる。

雨だ。ほとんど白に近い空を見上げた。

大きな音がして、真っ暗になった。

誰かが建物を爆発させて、大きな瓦礫が降ってきて。積み上がった瓦礫の隙間に入って死ななかったのは、多分きせき。でも、きせきでも、ここから出す事は許してくれないみたい。

真っ暗。冷たい。目が覚めたら仰向けになつてて、身体中に固くて重いものがぶつかつてて、動けない。身体の横にぴったりくっついてた左手を持ち上げて、顔の上にある石を押したけど、全然動いてくれない。びくともしない。

言う事をきかなかったから。ひとりでこんなことまで来ちゃったから。ごめんなさい。ごめんなさい。

でも、怖いよ。いやだよ。お願い、出して、ここから出して。だれか、だれか助けて。

誰か聞いてくれるかもしれないから、大きな声を出した。出そうとした。だけど、さっきあの人を探しているときに、いっぱい叫んだから、空気がすごくほこりっぽかったから、のどがからからでち

よっとしか声がでない。出ても、ここに人がいないことは、知ってる。

動けないから、ずっと上を向いていたら、なにかが顔を伝っていた。

しばらくして、自分の涙だって、気付いた。

怖い。ここで、死んじゃうのかなあ。頭がぼんやりする。なにも考えられない。考えたくない。

また、目が覚めた。涙は乾いてた、というより、もう出なくなってる。

何分たっただろう。何時間？もう、いいや。さつきと同じで、真っ暗で、何も見えない。私、もう死んじゃったのかなあ。

でも、足が痛い。尖った瓦礫にさわって、じっとしてるけど痛い。だから、まだ生きてるんだ。こんなに怖いのに。寂しいのに。死ぬまで、どれくらい辛いのかなあ。いやだ。そんなの、いやだ。

こんな思いで、死んでいったのかなあ。

だれにも助けられず、寒くって、もつと痛くて、怖くて、一人ぼっちで。死んじゃったのかな。

私も、死んじゃうんだ。怖い。死にたくないよ。生きていたいよ。でも、動けない。何も聞こえない。何も出来ない。死ぬしかない。

また、時間がたって、音がした。近くだった。遠くだと思ったけど、近かった。

少しして、顔に、冷たい水が落ちてきた。上の瓦礫の隙間から。次にはほんの少しだけ、光が落ちてくる。

すぐに、その瓦礫はなくなって、遠くに空が見えた。夜になってた。でも、この中よりは、ずっと明るい。雨は止んでる。

外から、だれかが手を伸ばしてきた。だれか分からないけど、なんとか左手を上げたら、その手がしっかり握り締めた。

温かい、左手だった。

chapter 2 - 1 (後書き)

176日ぶりの更新らしいです。内容を大幅に削ってやっと出来ました。FD一枚だけにデータを保存するなんてこと、二度としないと誓いました。

chapter 2 - 2

「またお前か」

怒りを通り越して呆れを含んだ声に、どうも、と、セグは頭を下げた。

「でも、指がとれただけなんで」

「そんなら、軍部内でみてもらえばいいじゃねえか」

そう、軽く声を荒げる修理屋の男の年は、六十は過ぎていそうです。すでに老人の域に入っていたが、その威勢の良さは目の前にいる、息子という年よりも更に若い兵士より勝っている。

「ここで直してもらったほうが、壊れにくいんだ」

「壊すことを前提にするな」

なんだかんだ言いながらも、修理屋は、部屋の大半を占める机の、端に置いた椅子を指した。内心安堵しながら、若い兵士が彼の後ろにいる影に短く言葉を告げる。それに従い、右手の薬指を失くした少年がそこに座った。指の千切れたところから、短いケーブルがはみ出している。

全世界を巻き込んだこの戦争も、今年で六十年になる。大半の国がこの不毛さに気付き、降伏し、日常を取り戻していく中、この国はまだそれを認めてはいなかった。科学技術、軍事力諸々において世界最大級の力をもつ国を隣に持っているのに、何故ここまで持ちこたえる事ができたのか。

この国が世界一を誇る、ロボット工学を最大限に駆使しているからだ。開戦後二十年目にして開発された、人型戦闘兵器。通称 *arme*。病氣、怪我等で瀕死状態にある人間の脳を頂戴して細工し、中枢としていたので、コストの大幅な削減も可能にした。脳提供者の親族から許可を取らなければならないので、製造された数は少ないが、生身の兵士よりも戦闘向きだ。その為に造られたのだから当たり前前なのだが。見た目は人と全く変わらない。勿論、感情や記憶

に関する部分は焼き滅ばされているので、人の言う事に忠実に従い、コマンダーと呼ばれる役割の軍人が一人一体担当する事になっている。

「おい、セグ」

「ん？」

「毎回言うようだが、ほんとに反省してんのか」

「してる、してるって。でもさ、何故かこいつ壊れ易いんだよな」

両脇に店が並ぶ大通り、どこも質素だが、そこで活動する人々の活気はそれを気にさせない。沈んでいく夕日が今日の終わりを告げる中、声を上げて客の呼び込みをしている人や、家路を駆ける子ども達、仕事帰りに連れ立って歩いて行く大人たちが目の前を通り過ぎて行く。裕福とは呼べない地域だが、この若いコマンダー、セグはどこか懐かしいその雰囲気が好きだった。開かれた修理屋の店先に立って、何をするでもなく、それを眺める。

「お前、こいつに無茶させすぎてないか」

ほんの僅か低くなった声に、振り返った。修理屋は、顔も上げずに続ける。

「他のやつと比べてこいつがここに来る回数が、何倍になってんのか知ってるか」

「何倍……。さあ、二倍いくのか」

「馬鹿言え、三倍以上だ」

「三倍で、まじかよ。つまりあれだろ、他が一回壊れる間にこいつは三回壊れてるってことだろ」

「やっと気付いたか、明らかに異常だろが」

そう言われ、セグは腕を組んだ。コマンダーの数はかなり少ないので、他との交流もあまりないし、会ってもそんな話はまずしない。だから知らなかったが、異常だという気はする。

「でもなあ、この前点検したときも問題無しって結果だったんだけどな」

「軍部がおかしいんじゃないのか」

「んなこと言わないでくれよ。言われてみれば、確かに無茶してる気はするけどさ、命令は他と変わらないはずだぜ。なんつーかさ、忠実すぎると思うけど」

「そりゃ別にいいじゃねえか」

「それが限度越えてるっぽいんだよ。自己防衛が効かないっていうか」

本来は任務遂行の際でも、ある程度は自己防衛として自分で自分を守るように出来ている。

「あまりやらないんだよな、それを。少々の危険なら突っ込んでくんだよ。それでボロボロになって帰って来る」

そのとき、なんだか複雑な感情に襲われる。自分の命令で人が傷つき、死んでいく。当たり前なのだが、しなければならぬことなのだが、自分が被るべきその重荷を無理矢理負わせているような負い目が沈む。痛みも感じない、泣きもしなければ笑いもしないこのロボットに。

何馬鹿な事考えてんだ、これは兵器なんだ。改めて彼は自分自身に言い聞かせる。

「けどさ、優秀だって言われてんだぜ、こいつ。その分強いから危険を顧みないのだから、常に全力で敵に向かう。全力だから、他のものよりも強い。」

「優秀？ 人殺しの成績がか？」修理屋はもう少しでそう言いそうになったが、まだ二十歳そこそこの彼には残酷すぎる言葉だと気付き、寸でのとこでその言葉を飲み込んだ。

「だからって壊していい理由にはならん」

そう言い切り、セグの顔をちらりと見上げ、自分の判断が間違っていないかったことを知った。

自分の受け持つ兵器が優秀だと言われていることへの驕りおこや満足感、その横顔に微塵もなく、反対にどこか憂愁すら感じられる。背景の一部である夕日が、そんな雰囲気をもし出しているせいかもしれないが、ロボットの銀髪に片手を置いている様子には、忘れ

去られたはずの幼ささえ覗けてしまう。

再び腕を組み、一步店に入ったところから、セグは翳りを帯びてきた通りを眺める。何かを見ているようで見ていない目ではなく、確かな何かを捜し求める目で。

自然とこういうことには敏感になってしまった。自分を見る、誰かの視線には。誰かが見ている。そして、その誰かは直ぐに見つかった。

通りの向こうにある家の前で、家人と思われる者と通りすがりのような者が話し込んでおり、後者の側にいる、十年生きているかいないかといった幼い少女が、顔を振り向けてこちらの方を見ていた。あいにく、子どもの気を引くようなものは何もない。軍人なんてあちこちで見られるし、まさか椅子に座っている少年がロボットだと気付いたわけではないだろう。店先よりも少し奥にいるのだし、薄暗いそこが見えるのならあの子はよっぽど目がいい。

やがて決心したのか、薄茶色の髪を背中まで垂らし、片足に薄く包帯を巻いている少女は、幾度も後ろを振り返りながら通りを横断しだした。極めて大人しげな行動に、連れ合いが気付く様子はない。長袖をふらふらと振りながら歩いてきた彼女は、セグから三メートルは距離を保ったところでピタリと足を止め、おどおどと視線を泳がせる。

「まいったな」と、声を出さずにセグは小さくため息をついた。子どもとの接し方など、習った事はない。

「おい」

迷った拳句、この空気に耐え辛くなった彼は普通に声をかけることにした。が、店先から中を覗き込んでいた少女は、びくりと身体を震わせ、明らかに怯えた表情で見上げる。

おいおい、頼むから泣くなよな。その可能性が否定できない彼女へ、「なんか用か」と続けた。

「あ……あ、あの……」

しどろもどろになりながら、彼女は風に吹き飛ばされそうなか細い

声を出す。やがて、俯き加減な顔を上げ、「おれい、言いにきたの上目遣いに呟いた。

「お礼？」

「助けて、もらったから……」

数歩歩み出て、店の一歩手前まで近づくと、「ありがとう」と子どもらしく大きく頭を下げる。

彼女が勇気を振り絞って礼を言い、頭を上げると、堪えるような笑い声が聞こえた。すぐに、修理屋の老人が豪快に笑い、自分の横にいる兵士も吹き出し、尚且つ口を手を当てて懸命に堪えようとしている。

なにか間違った事をしてしまったのだろうか。急速に不安に包まれ、泣きそうな顔をする彼女に、「悪い悪い」とセグが片手を挙げ、修理屋がやっと少女の方を見る。

「嬢ちゃん、こいつは人間じゃないんだ」

「えっ」

にわかには信じられず、彼女はまじまじと前方にいる少年を見る。ようやく笑うのをやめた兵士を、その赤い瞳で不思議そうに見上げ、右手を横の机に投げ出している。その手の先を見た途端、思わず息を呑んだ。

指が一本ない。もぎ取られたように千切れており、その代わり当たった金属の指を、取り付ける作業の途中だったらしい。

「ロボットなの」

「そう。パツと見じゃ分からねえけどな、皮膚の下は全部機械だ」

「名前は、なんていうの」

初めて、怯えのない瞳で彼女がセグを見上げた。それなのに、セグは逆に予想外の言葉へ若干惑ってしまう。驚きが少なすぎやしないか。子どもの柔軟さっていうのはやっぱりすごい。

「長ったらしい製造番号がついてんだけど、その文字とって俺はヨウって呼んでる」

正式な製造番号は、「Y3562-140」最後の0は数字のゼ

口だが、他に思いつかなかったし、他の奴もだいたいが適当だ。実在する人物の苗字なんかをつける奴もいるが、極めて稀だ。いざとなったとき情が生まれかねない、そうになったら、終わりだ。

何度か頷き、彼女はその名前を呼んだ。自分のあだ名を認識し、振り向いた光のない赤い目に、彼女が何事か話しかける。理解しているのかは分からないし、必要な言葉しか話さないようにプログラムされているので、返事はないが、どことも不思議そうな顔をしているように見える。表情筋が生身の人よりも極端に少ないし、そんなはずはないのだが。

少なくとも、初めてこの人型戦闘兵器を見たとき、セグは恐れを感じた。国の科学の粋を集めて造られた人殺しの道具に、それが全く人と同じ姿をしている事に、畏怖した。そのときはすでに子どもではなかったのに。しかし彼女には、全くそれが見られず、むしろ笑ってすらいる。

「どこで生まれたの」とか、「何が好き」などという答えのない質問に、良くても「分からない」しか返ってこないのに、少女は楽しそうに笑っている。

奪われる側の子どもと、奪う側の兵器が、恐怖も痛みもなく向き合っていることは、限りなく新鮮だった。少なくともセグには。その様子はあまりにも自然で、違和感など微塵もない。

「カヤ！」

突然、切羽詰ったような大声が、遠くから聞こえ、あっという間に距離をつめた。

「あっ、あのね」

少女が離れていたことに気付いた、連れらしき女が、その肩を掴むと自分の後ろに回した。カヤと呼ばれた少女をかばうような位置関係になり、責めるような目でセグを睨みつける。肩を少し過ぎる程の茶色い髪に、漆黒の瞳をした、女性にしては割と背の高い女だ。流石に、仲間内では背は高くないセグよりは低い、年はあまり変わらないさそうだ。

「カヤに何をした」

いきなりの事態を理解しきれない彼に、問い詰める。

「なにつて、別になにも」

とりあえず真実を彼が告げ、彼女の後ろから顔を出したカヤがなんとか言葉を挟む。

「あのね、この前わたしを助けてくれた人がいたから、だから、ありがとう言いに来たの」

話は聞いていたのか、彼女はセグから視線を外し、ヨウの方へ向けた。それで、確信したらしい。

「ロボットか。たしか、アームっていう」

再び向けられた、彼女の探るような瞳へ、セグはなんとか動揺を隠す。人型戦闘兵器のことは、殆ど国民に知らされていない。脳の提供者を探すときも、募集しているわけではなく、極力秘密裏に行なっている。必要以上に倫理的問題を騒がれても面倒だからだ。その名前も、そこかしこに流通しているわけではない。

「お前、何で」

「そういえば、人の脳を使ってるんだったよな。人を兵器にするなんて真似やってるって」

「でたらめ言ってんじゃねえよ」

「でたらめ？ それはあんたが一番よく知ってるじゃない」

皮肉な、ひきつった笑みで彼女はセグを見据える。極めて悪い空気しかない。

「好きで人殺すようなやつを考えなんて、分かりやしない」

「好きで人殺すわけないだろ」

「どうだか」

彼女の態度に流石に腹が立ってきたセグには、その瞳の奥にある憂いに気付く事ができない。

「あんたみたいな奴らに、私たちの家族は殺された。この子は、右腕まで奪われた」

うすうす感づいてはいた、カヤの腕、肘の少し先からは存在しない。

先天的なものか、後天的なものかは分からなかったが。

「そんなやつ、私は許せない」

許してもらわなくても結構だと非常に言っただけだったが、彼女が去る気配を見せたので、我慢してその背が雑踏へ消えていくのを眺めた。左手を引かれた力やが不安げに幾度か振り返ったが、それもすぐに見えなくなつた。

「えらく嫌われてんじゃねえか」

片手で自分の髪をがしがきながら、その声に振り返る。

「まったく、勘弁してほしいよな。八つ当たりしてやつたろ、これ」

「よくあることじゃねえのか」

「まあ、そうだな。重ねちまうのはしょうがねえんだろうけど、嫌になるわな」

ため息混じりに軽くヨウの頭を叩いた。体温維持装置がついているので、機械らしくなく、温かい。救出の際、少しでも相手に安心感を与える為らしいのだが、実際に効果が上がっているのか、セグは知らない。

当たり前だが、嫌そうな顔一つせず、ロボットは彼を見上げた。

無機質な赤い瞳に、光はない。

chapter 3 - 1

人の住まない荒れ果てた村。

村の中で静かに響く銃声。

銃声の中で音もなく倒れる影。

影を染めていく液体は赤。

赤が、どこまでも広がっている。

燃え盛る炎と誰かの悲鳴。

悲鳴の中に混じる言葉。

言葉が聞こえるという欠陥。

欠陥の向こうで、誰かが呼ぶ。

人気のない、比較的国境に近い荒れ果てた村を、人型戦闘兵器「

Y3562-140」通称ヨウは、極めて緩やかな歩調で進む。

気温はかなり上がっていて、人の体温とそう大きな差はない。これではサーモグラフィーもろくに役に立たない。もし誤差が起きて見当違いに人を殺してしまえば、それが自国の人間であれば大事だから今は使えない。

広く茶色の道の脇に、木造の簡素な家が立ち並んでいる。殆どが扉の蹴破られた後で、昼なお暗い家の中の様子が見て取れる。ひたすら荒らされていて、外にまで家財道具や小物が散らばってしまっており、未だ消されていない血の跡がこびりついている。

虚ろな瞳でそれらを確認し、瓦礫やなんかが飛び散っている道を歩き続ける。鳥の声も、木や風の音も聞こえない、蒸し暑さに支配された静寂。村一帯に満ちている。

だが、異常な聴力を持っている彼は、それに気が付き、ふらりと

足を止めた。だらりと両手を下げ、なんの警戒もしていないように見えるまま、ゆつくりと横へ振り向いた。

その直線状の廃屋に潜んでいた兵士は、彼の予想外の動きに思わず引き金に指をかける。しかし、指にはまだ力が入らなかった。スコープを覗き、更にその気持ちも薄れていく。

「こども……？」

そこに映ったのは、ただ理不尽な戦争に傷つけられた、一人ぼっちの少年だった。土ぼこりに汚れた顔はただ呆然としているように見え、身体中からは力が抜け切っている。その彼が、こっちを見ている。自分の敵を、じつと見ている。

一步こちらへ踏み出した彼へ、兵士は何事か呟いた。誰かに届ける為ではない、ただの独り言のような言葉を。

彼の知識では、聞き取ったその単語の意味を解する事はできなかった。瞬時に最大限まで脚力を引き出し、地面を蹴り、敵のもとへたどり着く。その勢いのまま、片手を相手の額にあて、向こうの壁へ叩きつけた。ヘルメットでもしていたら、刃で貫くつもりだったが、その必要は無かった。

手の力を抜くと、後頭部の潰れた兵士が、壁を赤く彩りながら床へ伏す。

運悪く即死を免れてしまったが、その心臓も、赤い瞳が見下ろしている間に拍動を止めた。

完全にそれが死体に代わるのを確認し、数分後に、殺人兵器は再び村を彷徨っていた。

相手の同情と油断を誘え、かつ活動が最大限に行なえる、幼すぎず大人び過ぎていない容姿に、彼らは造られている。その姿を見て、記憶の中の誰かを思い出す者がいる、そんな心の弱さにつけこんで卑怯ではない。戦場でそんな無駄な事を考える奴がいけないのだ。どうせ、そんな甘い覚悟では、いずれ近いうちに死ぬ。

ヨウの感じ取れる範囲では、生きている物はない。人どころか、犬や鳥でさえも、なにもいない。この死んだ村には。

ふと、彼は近くの家の土壁に目をやった。わざわざ目をやったというよりは、ただ視界に入ったただけだったが。

勢いよく燃え盛る炎。

異常な温度の、こもった熱風。

人の声。恐怖を代弁する、叫び声。

知らない単語。短い、いやに慣れた感じのする言葉。

自分に、呼びかけている。

誰が。

どこで。

誰が。

ひどく、悲しい声。

それらが過ぎ去った後、視界には灰色に汚れた壁しか映っていない。どこにも火はない、だが、火は見えていた。何の物音もしない、だが、誰かが叫んでいた。

ヨウは、一部が焼け焦げた壁を見つめたまま、先ほどの記憶を、今まで自分が視覚を通して記録してきたものから検索する。

一秒にも満たない結果によると、該当するものは存在しなかった。何かの間違いで記録がよみがえり、視覚に及んだものではなかった。では、さっきのはなんだ。あり得ない。存在しないものがよみがえるなんて。

重要なバグだ。しかし、今の優先順位はその特定ではない。この廃村に残っている敵を一掃する事。

彼の脳は、そう判断した。

軽い足取りで、片手に握れるほどの花束の茎を握り締め、カヤは石段を駆けていく。自分に与えられた、重要な役割を果しに行く。

結構しばらくの間、続いている習慣。

「暑いけど、みんな元気だよ」

そう明るい声で話しかけながら、幾つも並ぶ簡素な墓の前へ、彼女は花を一つ一つそえていった。今は土の下に眠っている仲間に手を合わせ、言葉をかける。きっと聞こえていると信じながら。

今日は特に暑い。空はどこまでも青く、遠くの方にむくむくと湧き上がる入道雲が見えるだけだ。

側の草むらに腰を落とす、しばらくの間それを見上げていたが、やがてカヤはゆっくりと立ち上がった。

視界が横倒しになっている。右頬を地面に押し付けているせいで殆ど生い茂った草しか見えない。その草が、鮮やかな緑色をしているはずのそれが、近くのものだけ赤く染まっている。身体から流れる血が、景色を赤に染めていく。

絶え間ない、浅く荒い呼吸のせいで、視界がぶれる。

どこかから、声が聞えた。憎々しげで、弱々しいかすれた声が、無い風を伝って聞えてくる。何と言っているのか、すでに本来の機能を失った耳は、聞き取ってくれない。ただ微かに、一番身近な自分の苦しい呼吸音だけがある。

しだいに、視界が暗くなっていく。

同時に、押しつぶされそうな巨大な何かが這い上がってきた。自分の中から、その暗闇に抵抗しようとする感情が、大きな何かが、どこかから。

だけど、闇は迫ってきた。抗えなかった。遠くに聞こえていた声が、一度だけ鮮明に、言葉として聞えた。

今までは機能を停止していた聴覚がよみがえり、近くで聞えた声に、ぴくりとヨウは反応した。自分の前方にあるのは、青い草原くさほらと、ところどころにある木々。それらの枝が高いところで重なり合い、空を薄く覆っている。ここの気温は比較的低い。涼しいというべきか。

血の跡はおろか、横倒しにもなっておらず、ただ立ちすくんでいた。検索結果には、今の記憶も存在しない。

「ねえ、どうしたの」

そつとその横に立った力ヤが、見上げながら問いかける。ただ涼む為に、かつての村の裏手にやってきたら、ロボットの彼がいた。じつと草むらの中に立ったまま、何かを見つめていたその姿に、人で

はないと分かっている、心配になる。

「何かあるの」

彼は、好奇心と不安感を器用に共に含んだ声を出した彼女を見下ろす。何かあるか、イエスかノーか。

「何も。何も無い」

ここには、何も無い。木と草と微かな風しか。

じわじわと、脳が何かに締め付けられる。機械で出来ているはずのそれが、潰されるように、押しのけられる。何に。かろうじて残った、人の部分に。

冷静で機械的な分析や演算など、その不可解な現象の前には、何の役割も果してくれない。あの暗闇は、それに抵抗する感情は、ない。

しかし、それが表情に漏れる事はない。

「そつかあ」

カヤは、足元を見下ろして軽く草を蹴った。さらりと、澄んだ音が空気を震わせる。

「でもね、ここね。私には、大事な場所なの」

真っすぐに自分を見下ろす瞳を、彼女の黒い瞳が見上げた。

「ここでね、わたしの兄ちゃんが死んじゃったのかもしれないの」
何でこんなことを話しているのか。相手がロボットだからなのか、殆ど知らない相手だからか。分からないが、彼女は口を開く。

「ここ、わたしがずっと住んでた村だったんだけど、なくなっちゃったの。その日にね、兄ちゃんも戦ったんだけど、いなくなっちゃったんだ」

自分が腕を失い、たった一人の肉親をなくした日。思い出しても、すでにその為の涙は枯れてしまっていて、今は出ない。

「ここで、血だらけで、倒れてたって。だから、助けなきゃってみんなで助けに行ったんだけど、そのときにはいなくなってた。地面が、赤くなってただけだった」

死体は無いから、死んだとは言いきれない。だから未だに、彼だけ

には墓が無い。どこかで生きているかもしれないから。

だけど、カヤには分かっている。彼が倒れていたのを見た人が、死んでいると判断したほど、傷ついていたのだ。血だらけだったのだ。勿論、逃げ出せるわけが無いし、それが出来ていたなら、戻ってきているはずだ。

生きていると信じているが、もう生きていない事は知っている。

「それでね、大人の人たちが言ってたんだけどね、あなたたちは、人間を使って出来てるんでしょ。でね、それに使われちゃったんじゃないかって言ってたの」

透明な潤いを湛えた瞳が、気丈にも笑いかけた。そして、その名を告げた。

しかし、人としての頃の名が、そのまま兵器として残っているわけは無い。その上、他の機体についての情報は、彼の中に入っていない。

「分からない」という返事を、喜びと悲しみを込めて、彼女は受け止めた。例えば人で無いとしても、彼を用いたロボットがあるなら会いたかったが、殺人兵器として生き続けているのは、見たくなかった。

「ありがとう」と、少女は呟いた。何故。自分は、正しい答えを与える事はできず、分からないと、否定の言葉を使ったのに。「ありがとう」は、人が礼を言うときの言葉。この単語を言われたのは、これで二回目。両方とも、彼女が使った。

ヨウには、彼女が理解できなかった。その小さな少女は笑っている。悲しそうな顔なのに、何故か笑っている。これは、苦しいときの人間の表情だという事実だけ、彼には分析することができた。

正面に戻した視線。赤く染まっていく風景。ジワリと滲むように、青い草と木の表面が、赤く染まっていく。

「どうしたの」

再び、カヤがたずねる。自分を見なくなつた彼を見上げる。その瞳

は、大きく見開かれているが、その視線の先には、生い茂る草しか認められない。

「ヨウも、ここにおもいでがあるの？」

何か探しているのだろうか。彼にしか見えない、記憶を探しているのだろうか。

彼がロボットだと熟知している大人なら、とてもそんな発想はしない。しかし、純粋に子どもである彼女であるから見抜けた、極めて真実に近い言葉。おもいで。

彼の口が僅かに動いたが、どういうわけか発声がなされない。かろうじて、かすれた小さな声が漏れているのだということだけ分かる。だけど、なんて言っているのかは聞き取れない。

「ねえ」

虚ろに前を見つめる彼の服の裾を、そつとカヤが握り締めると同時に、「しんだ」とヨウがやつと呟いた。

「えっ」

「……ここで……死んだ」

かつてここで失われた命があったことを、はつきりと彼が示す。

「死んだって、だれが」

「それは……」

苦しそう。そう、彼を見上げてカヤは思った。そんな微妙な表情など、物理的に不可能なはずなのだが、そんなことなど知らない彼女は、そう思った。本当に、苦しそう。

ロボットの彼が繋ぐ言葉を聞き、彼女は彼の言いたいことを理解する。

ここで、ヨウは。いや、以前の彼は死んだ。
確かに彼は、そういう意味のことを言った。

「起きろこのボケがあつ！」

唐突に耳朵を打っただみ声に、セグは飛び起きた。

「な、なんだよいったい」

「なんだもかんだもねえ、さっさと来い！」

自分はまだ寝ていいはずなのに、無理矢理仮眠室から引つ張り出される。わけがわからない。

「おい、なんだよ。なにがあつたんだよ」

「人型戦闘兵器が、一体なくなった」

「なくなつたつて。なんだよそれ、盗まれたとか」

「そんなわけねえだろ」

廊下を先導する仲間は心もち早足で、叩き起こされた不満よりも、ただ事ではないという不安が、急速に沸き起こってくる。

「最上級のA I 付きの兵器だぜ、そう簡単に盗られるわけねえだろ。製造番号 Y 3 5 6 2 - 1 4 0 が、修理のやつが朝見に行ったときには、消えてたらしい」

「消えてたつて……」

まあ、盗まれるわけはないだろう。だが、そんな非常識な自発行動をとるわけがない。

しかし、それより。

「ちよつと待て、それって俺の担当じゃねえか」

「気付くの遅せえんだよ！」

「どこ行つちまつたんだよ！」

「知るか、それを探すんだろが！」

ああ。とんでもないことになってしまった。

驚き間もないセグには、そう嘆く事もできなかった。

本当に来てくれた。

三日前に約束したときは、彼には悪いが半信半疑だった。人間みたいだけど、人間だとしか思えないけど、彼はロボットなのだ。こんな子どもの言葉など、聞き流されるんじゃないかと思っていた。だから純粹に、嬉しかった。

ヨウは、この前と同じ様にじつと同じ場所に立ちすくんで、木と草の海を見つめている。瞳に映っているものは同じはずなのに、違っている事は力ヤにも分かる。

「なにか、見えるの」

控えめに尋ねると、彼は一度だけ確かに頷く。彼にしか見えていない何か、おそらく、彼の脳が記憶している風景。その持ち主は、ここで死んだ。

一人と一体は、何も言わずにそこに存在し続ける。三日前が嘘のように、今日は真つ白な曇り空で、鳥の声も聞こえてこない。充満する静寂の中、彼らはただ、そこにいた。

あの時。自分は、死んだ。いや、正確には死にかけた。その時、最後に聞こえた言葉。

最後に、鮮明に聞き取れた言葉。

ああそつだ。

やっと、思い出せた。

あれは、自分が殺した、少年の言葉だ。

「最後に聞こえた」

ぽつりと、ヨウが呟く。

「聞こえたって、何て」

「力やって、言ってた」

「おい！ ヨウ！」

突然大声が響き、カヤはびっくりと身体を震わせた。

向こうの木々の間に見える誰かは、あっという間に近づいてくる。見覚えのある、若い兵士だ。

「なに、やってんだ。こんなところで」

驚きを滲ませながらも、セグは目的の側に立ち尽くすカヤに問いかけた。叱られたような、明らかに怯えた表情をしているが、今は構っていられるときではない。

「ここは危険だ。すぐに帰るんだ」

こくりと、少女は小さく頷き、大きな瞳でセグを見上げた。

「わたしが、約束したの」

「約束？」

「ここにきてつて、三日前にお願いしたの」

「きみが、こいつにか」

「うん」と答えた声を聞きながら、セグは驚愕からヨウを見下ろし、すぐに苦々しげな顔を作る。いくら人の言う事を最優先で実行するといっても、軍人でもない民間人の、それも命令でもない曖昧な約束なんていうものに従うわけがない。それも、居場所を抜け出てくるという、勝手過ぎる自立行動のもと。その上、無線にも応じない。あり得ない。しかしあり得てしまったんだから、今の状況をどうにかするしかない。

「とにかく、話は後にしよう。ここはもう……」

立ち入り禁止区域になる。そう言いかけた。

セグの足元の地面が弾け、反射的にカヤを抱えて木の後ろへ転がり込んだ。「伏せてろ」と短く告げて、拳銃を取り出し安全装置を外す。何が起きているのか理解できていないようだったが、彼女は大人しく、言われたとおりに草の中に伏せた。

チツと舌打ち混じりに、相手を確認する。草木に阻まれ、正確には分らないが、四五人はいるようだ。

まずいな。

一人でも危ういの、子どもを無事に守って生き残れるとは考え難い。だが、やるしかない。視線の向こうには、さっきと変わらずヨウが突っ立っている。

「くっそ、なにやってんだあいつは」

敵だと認識できているはずだし、発砲までされている。それなのに、戦う事も、防御する事もせずに、ただ無防備にそこにいる。これでは狙ってくれ、壊してくれと言っているのと同じだ。ひどいバグだ。帰ったらどうにかしなければならぬ。そのためにはまず、帰らなければならぬ。

セグのものではない銃声が響き、カヤが身を震わせた。

立ち尽くす機械の腕に、銃弾がめり込んだ。徐々に外側の人工皮膚や中の金属が零れ落ちていく。

一発が首をかすめた。内部の機械が覗かれる。

応戦したセグの銃撃に、一人が身を隠すが、攻撃が止む事はない。ロボットの足が狙われ、装甲が剥がれ落ちた。

「つつっ」

セグの肩を一発の銃弾が通り過ぎる。

溢れ出した赤い液体が、彼の肩口を染め、草に赤い模様を作り出す。

痛みに耐え、顔を上げたその目に、赤い瞳が映った。

ヨウが、振り返ってじっとこちらを見ている。光のないその瞳で、何かを訴えている。出来ないはずなのに、そんなわけではないのに、その表情はどこか寂しげで、孤独を浮かべている。

なんだ。何が言いたいんだ。

一瞬、この状況下を忘れて、胸中でセグは問いかけた。

ヨウは、答えなかった。答えるわけがないが、答えなかった。

ふっと一步を踏み出し、二歩目で地を蹴った次の瞬間には敵の眼前にその姿は現れた。そのまま、相手の首へ腕にくつついた刃を突き刺す。次に撃たれる前には、すでに移動を開始していた。

的確に、銃口の向きから弾道を演算し、それから僅か数センチ離れながら、あつという間に次の獲物にたどり着く。背後に回りこみ、その背を突き刺し、相手の胸から刃を露出させる。

そのまま数秒停止した。

彼が盾にしている敵の胸から腹へ、五発の銃弾が飛び込む。

刹那に刃を引き抜き、地を蹴った。

強かった。ここにいる誰よりも、彼はずっと、ずっと強かった。

俯いているカヤの頭を軽く抑え、瞬きするのも忘れ、セグはそれを見続ける。一方的な殺戮、本気を出した人型戦闘兵器に、もはや銃弾など当たらない。躊躇いなどない。当たり前だ。殺人兵器としての、存在意義を貫いているだけだ。

それなのに、どうしてだろう。無意識下で「もういい」と叫びたくなったのを、なんとかセグは堪えた。それと同時に、途方もない吐き気のようなものが襲ってくる。血に怯えていては、兵士なんか務まらない。違う、そんなことではない。気付いたただけだ。今まで自分がやらせていたことを、間近で見ってしまったただけだ。

今までずっと、こんなことをし続けていたんだな。俺が、お前にやらせていたんだな。

同情などというくだらない無責任なものじゃない。哀れみでも、自分に対する罪悪感でもない。それなのに、ふと、そんな思いが沸き起こった。ただ事実を見て、彼はそう思った。

「おい！ 無事か！」

後ろの方で声がし、セグは緩慢に振り返る。見覚えのある顔がいくつか、向こうからやってくる途中だった。

「民間の子だな」

「ああ。保護してやってくれ」

素直にカヤは立ち上がってくれた。その澄んだ瞳を長いこと見ていられず、セグは再びヨウへ視線を戻す。「見つかったのか」という仲間の声が聞こえたが、返事はしなかった。

最後の一人が地に倒れ付し、髪まで赤に染めた兵器が、足を止め

た。鋭い刃先から、彼のものでない血が滴り落ちている。

ゆっくりと、振り返った。血にまみれた顔が、こちらを捉えた。

「ヨウ、止まれ」

不意に降りた静寂を破り、セグが指示を出す。

しかし、人型戦闘兵器はこちらへ一步を踏み出した。

「止まれ。止まるんだ」

諭すように呟くが、その動きは止まらない。一步一步、距離をつめてくる。

「どうした、こいつ、言う事きかないのか」

驚愕と恐れを交えた声を聞き、そうかもなと声を出さず答える。不思議と、疑問も恐怖も、セグには起こらない。

なにびびってんだよ。こいつはもう、殺さないんだぜ。俺らは敵じゃねえんだから。

明らかに、背後の仲間は、パニックに陥っている。この殺人兵器の強さは、使用者である自分達が一番よく知っている。殺す気がかってこれれば、今の自分達に勝機は小指の先ほどもない。

専門であるセグは、その強さを一番よく知っている。

だが、怖くはなかった。怖さなど、あるわけがない。

帰ってきたただけ。人殺しを終えて、いつものように、帰ってきただけ。

そう、いつものように。いつもと同じように。怖いわけがなかった。

だから、言いたくなかった。

だが、言わなければならない。これが自分の役割なのだから。

「止まれ、Y3562-140」

ふっと、ヨウがセグに視線を向ける。その瞼が、ゆっくりと閉じられていく。

銃撃を受け、片足の膝が砕かれた。

バランスを失い、その場に殺人兵器はばったりと倒れ伏した。

硝煙を上げる、仲間が握っている銃を、セグは振り返らなかった。

chapter 4 - 1

その場所は、狭く暗い。

暗いから何も見えない。

何も見えないし見たくない。

見たくない、それは誰の意思。

誰の意思が、ここにある。

灰色の空から降り続ける雨。

雨に打たれる道に人はいない。

いない誰かの鳴き声は響く。

響くその先にも、誰もいない。

「Y3562-140の開発担当責任者は、すでにこの世にはいません」

研究開発班の、しっかりした印象を受ける代表者は、さらりとそう告げた。

すり鉢状の部屋の底で告げられた言葉に、僅かながらざわめきが起きる。底を覆うように、周囲は半円形に傍聴席が設けられており、その中の八割ほどが埋まっている。この時間に作戦のない軍人は、殆どが参加する事になっている。

「二年前に、肺癌で病死しました」

それならしょうがないな、と、まるで他人事のように、セグは突っ立ったままぼんやりと考えた。死んでいるのなら、責任を押し付けることは誰にも出来ない。

傍聴席から少し離れた、円の中心に近い位置の机の前。机って言うのか、これは。学校の教卓みたいだ。なんにしても、裁判にかけ

られる被告人になったみたいで、いい気はしない。せめて、背筋く
らいはきちんと伸ばしておく。

「他と違うことをしているのに気付かなかったのか」更に偉い人間
が言う。今のセグには、誰のどんな肩書きも、どうでもいいものに
思える。

「基本的に、プログラミングは担当者が単独で行なう事になってい
ます」

研究者は、この雰囲気には臆することなく淡々と述べる。

「報告書には偽装したものが使われ、機体もその後の検査にかかる
ような誤差はなく、現に今まで誰にも気にとめられることはありま
せんでした」

「その、誤差というのを説明してもらおうか」

「分かりました」と答え、彼は手元に置いた資料の束に目を落と
した。

壁の一面を占めている馬鹿でかいスクリーンに、円が表示される。
中央から線が幾本か伸び、円グラフに変わった。文字が表示され、
その意味を伝える。

「人型戦闘兵器、通称 arme の脳には、制御と自立の比率が元か
ら定められています。この場合の制御とは、人の命令に従うことで
あり、自立とは次の行動を自分で判断し、実行する事を意味します。
通常はこの比率が、七対三になっています。これによって、人とし
ての知能を持ち自らの保全を図る上で、制御者の命令に服従します」
「ですが」と、否定形を使った。もう一つ別の円グラフが姿を現
す。

「Y3562-140の場合、この比率が八対二に定まっています。
つまり、命令を遂行する比率は通常よりも高くなりますが、自らを
省みる事ができない。簡潔に言えば、自分を捨てる、壊れやすいも
のになります」

「それと、今回のことがどう関係すると言っただ」

「この設定は、通例の arme とは異なる。つまり、想定外の誤差

やバグが起こりやすくなる、その原因だと思われます」

ヨウの開発者は、ずいぶんと粹な人物だったのだろう。そいつの気まぐれのおかげで、大変な事になってしまった。だが不思議と、憎いだとかなんだとかいう感情は、セグには湧かず、そこにあるのは、やってくれたなあという呆れと、感嘆に近い感情だけだった。

さざ波のようなざわめきが充満し、かといって言葉として聞き取れるようなものは発生しない。だれも、この状態を把握し切れず、また、はつきりと責任を押し付けられるべき人間がいない為の空気だった。

「分かった。整備班、今までこのことについて、気付いていた点はなかったのか」

偉い人に矛先を向けられ、指名された整備班代表の四十半ばほどの男は、大層な驚きを隠さず、椅子から立ち上がった。動揺しすぎてその雰囲気には怒りに近いものさえ感じられる。

「わ、我々のところでは、今まで少なくとも、疑問を抱いたことはありません」

「故障が多い事には気付かなかったのか」

「点検の場合が多かったので。異常は見受けられませんでしたし、まず民間の専門店を利用する事がほとんどだったので、故障の点は知りかねます」

「おいちよつと待て」と、あと一步でセグは口出ししそうになった。まさか、あそこに責任を押し付けるつもりか、そう言いそうになったが、自分の身分はわきまえているつもりなので、なんとかその台詞を喉元で押しつぶした。

突然名指しされ、思わず背筋を伸ばしなおす。

「一番近い場所にいて、このことに違和感を感じなかったのか」

「違和感はありません」

嘘をつくつもりはない。

「しかし対処するつもりはなかったと？」

「点検結果に問題はなかったので」

俺も嫌な奴だなと、答えながら思う。刺すような視線を感じるが、しかし本当にそう思っていたんだから仕方がない。

「それに、先程も言いましたが、個性の一部だと思っていました」
人型戦闘兵器は、基本はどれも同じだが、一体ずつ異なった点を幾つか有している。髪と目の色の組み合わせ、そして内面。殺人兵器に内面なにもあったもんじゃないが、簡単な受け答えに対する僅かな違い、微妙な差が生じている。

だから、ヨウのそれも、その一つだと想定していた。ほんの少し周りと違っているだけ、自己保全という箇所に現れているだけだとそれ以上、セグには反論する気も訴える気もない。

ただこの、欠陥品に対する処置の決定という名義で行なわれている責任の押し付け合いを、違う場所での出来事のように眺めていた。最終的に自分に回ってこようが、それが結果なら仕方がないという気すらしていた。それすら離れたところから眺めている自分に、少し驚いていた。

窓もない小さな倉庫のような部屋、その隅に置かれた長いすに、来たときと変わらない姿勢で、ロボットは浅く座っていた。

「Y3562-140、起きろ」

セグが呟くと、閉じていた瞼をゆっくり開く。停止していた全機能が回復するまでに、十秒もかからない。ついて来るように言つと、黙ったまま立ち上がり、部屋を出た。

応急処置はしたと言っていたが、本当に応急だったようで、無事だった片足に体重をかけながらアンバランスに歩いてくる。感情はないし、意識もないはずだが、あまりにも必死なように見えたので、セグは歩く速度を落とした。

俺はあまいのかな。ぼんやりとそう考えながら、偏った足音を聞いた。

雨が降り出した。ぽつりぽつりと髪を濡らしていたそれは、あつという間に激しさを増す。通りにも、人は見られない。細い雨が、地面を打つ。

霧のように景色が白みを帯び、音を奪い去っていく。天が降らせる雨音だけが、身体中に染み込んできた。水溜りを踏みつけ、冷たい雨に全てをまかせ、静寂が満ちた通りを歩く。

「またお前か」

「すみません。開いてますか」

「見りゃあ分かるだろ」

奥から出てきた修理屋に、セグは軽く頭を下げた。

こんな雨の日に客なんか来るはずが無い。それこそ見れば分かるのだが、この入り口はいつも通り開け放したままだ。どうやら、セグたちが来ることを想定し開けていてくれたらしい。食えない親父だ。

「また派手にやられたな」

「一応、応急処置はしてもらったんすけど」

「とにかく奥まで来い。そこ閉めとけよ」

「了解」返事をして、セグは引き戸に手をかけた。立て付けの悪いそれは、軋んだ音を立てながらようやく閉まる。吹き込んでいた雨風が、戸を激しく叩く音が響いてくる。

台の周りに工具が雑然と並んでいる、車庫のような簡素な場所、この店の目的にぴったりだ。

礼を言いながら、放られた乾いたタオルを受け取り、セグはがしがしとずぶ濡れになった髪をふく。台の側で、ロボットも同じ様な事をされていた。全長百六十センチちょっとで、その修理屋よりも低く造られている。あまり高くてもいけない。敵にとっても、自分より背の高い相手のほうが、同情はかけにくい。これがギリギリだ。

指示された通りに、ヨウは台に上って横たわった。隅までを照らしきれない裸電球の元、その足を見下ろす修理屋が顔を顰める。

「これが応急処置だと。ただ鉄棒入れただけじゃねえか」

「そんなひどいのか」

「これじゃ無事な部分まで潰れちまう。ほんとに大丈夫なのか、軍部は」

当てのないばやきに、小声で「わかんねえ」とセグは呟く。国軍ですら、自分の所属している場所ですら、なんだか信じられなかった。責任を押し付けあう彼らも、軍人である自分も、汚い生き物だ。「しょうがない、やるしかねえか」

その声が、雨音に混じる。

屋根を激しく雨が打つ。こもったその音は、テレビの砂嵐によく似ている。空の木箱に座り込み、ぼんやりとそんなことを考えていた。

「こいつの処分は、どうなった」

ふと、修理屋が尋ねた。

「しばらく出勤禁止。一ヶ月して異常が見られなかったら、試合続行。責任問題はうやむや」

軍部に認可されている為、ある程度の情報は手に入るのだろう。生まれつきの異常があったことも、その足は味方に破壊されたのだという事も、全部知っているはずだ。

「こいつ、いつまで戦うんだろうな」

ぽつりとセグが呟く。

「人の脳撃ち抜かれるか、それこそ体がずたばらの粉々になって、再起不能だと認められるまでだな。ちょっとやさつとじゃわしらは直せるし、それこそ上が許さねえだろ」

「俺、こいつには、なりたくねえな」

膝に頬杖をついて、窓の向こうの雨を眺めながらそう言ったセグを、修理屋は振り返る。彼はそれに気付かない。

彼の立場にある人間は、使用可能だと認められた場合、その脳は

死後再利用される。強制であり義務だ。

「そんぐらいなら、一発で頭ぶち抜かれて死にてえよ」

本音にかぶせる乾いた笑い声。セグのそれが、虚しく空気に霧散していく。

「大体の奴はそう思ってるだろうよ」

「だよな。うまくいけば死ねるだけ、俺はましだな」

半永久的に戦い続けなければならない、人型戦闘兵器を横目で眺める。終わりがあるだけ、自分はましだ。セグはそう言う。

だけでもし、死に切れなかったら。こういう風になってしまったら。生きても死んでも、自分は人を殺し続ける。いつそれを止められるのか、だれにも分からないまま。

それを否定する事は許されない。この軍服を着て銃を握り締め、人型戦闘兵器に指示を与えている時点で、許されるわけが無い。

だからそれをごまかす為、本気でないと自分に言い聞かせる為、セグは軽く笑う。

「それなら、軍人なんかならなきゃよかったじゃねえか」

「なっちまったもんはしょうがねえよ」

「どうしてなったんだ、お前は」

「なんで、だろうな。ほんと」

頭にタオルをかぶったまま、首筋をかいて考える。思い出すというより、考える。

「俺んどこ、親父が兵士だったんだ。だからかな」

「そんなに尊敬できる親父様だったのか」

「いやいや。だって俺、覚えてねえもん。ずっと前に戦死しちまったからさ、顔も写真でしか知らねえんだ」

「じゃあ理由にならねえじゃねえか」

「理由、ねえ。後付のモンでいいなら言うよ」

返事をしない修理屋を振り向き、セグは話し出す。

「俺の母親、そんな強い人間じゃなくてさ、親父が死んじまって、親として駄目んなっちまったんだ。飯からなにか、俺と兄貴で仕

切ってた。そりゃあ、励まそうと頑張ったけど、駄目だった。一度塞ぎこむと、夜も寝ないでぼけっとしちまうの。人形みたいで何話しかけても返事しない。してもまるで的を射てない。今でも、そうなんだ」

セグは軽く首を横に振る。

「ひとりにしちゃおけないからさ、故郷くにには兄貴が残ってる。だから、俺は好きにしていって言われたんだ」

「それで、わざわざ死に行くようなもんになったのか」

「死ぬ気はねえよ。でも二人も兄弟がいるのに、どっちも残ってるなんて笑えるだろ。だから体裁のためっていったら、まだ格好もつくかな」

雨の音がいつそう激しくなる。それにかき消されることなく、セグの声は静かに空気を振るわせる。

「母親って気はしなかった。親がいる安心なんてなかったし、頼れるものもなかった。だから俺は、父親がほしかったんじゃないかな。親父が死んだ場所に行けば、何かあるとも思ったのかもな。

別に何も無いってことは分かってたし、幻想を抱きたいとも思わねえけど。でも、俺が軍人になるって言ったときは、止めてくれって言われたな」

「そりゃあ、そうだろうな」

「今のポジション、一応死にくい場所なんだ。そういう事で、なんとか領いてくれたよ。もともと、俺らに命令するような人じゃなかったし、さいわい自分の弱さを知ってたし」

「兄貴は、何て言ったんだ」

「自分がそうしたいんなら、そうしろって」

セグは自分でも気付けないような笑顔をつくる。うすっぺらいそれを、自身に貼り付ける。

「そんで逃げたんだよ。俺、きつたねえだろ。母親が反論できないのいいことにして、兄貴の優しさを利用して、逃げたんだ。居もしない親父が死んだ場所に。一応親だし、泣いてたんだよな。最後

に家で過ごした夜」

「それから、家に帰ったりしたのか」

「一度も。今更どの面下げて帰れんだよ。多分さ、俺に帰る気がないってことを知ってたから、泣いてたんだと思う」

「生きてるうちに、帰ってやれ」

顔を上げず修理屋は言った。返事もせず、セグは苦笑する。帰るべき場所がある。だけど帰れない。くだらないプライドのせい、申し訳なさの境地の為か、分からない。しかしそれを実行するには、帰るという意思はあまりにも深いところに潜り込み過ぎていた。

不規則なリズムで、雨の音が全てを包み込む。

静寂をほどよく破っていく。

「今度、ちゃんと検査してやらんとな」

修理屋は壊れるたびに手を加えてきた、兵器を見下ろした。命があれば、何度こいつは死ねただろう。言葉があれば、表現できる能力があれば、彼らは死にたいと言っただろうか。それとも、生きたいと言っただろうか。

雨は、止まない。

部屋に行くと、案の定カヤは泣いていた。暗い部屋の寢床で、声を殺して泣いていた。

側に寄ってそっと撫でながら、少しだけ話をして、眠るまで手を握る。小さく温かい、子どもの手。悲しみを握るには、小さすぎる。規則的な寝息が聞こえ出し、血の繋がっていない家族、アスナはゆっくり手を離れた。

カヤに決定的な心の傷を与えた者。それが、見つかったのだ。先日若い兵士が連れていた人型戦闘兵器、銀髪に赤目のあれが、あれの脳の持ち主だった奴が、カヤの家族の命を奪った。自分達にとって、憎むべき相手。

こんなに優しく幼い彼女を傷つけたそれが、彼を殺した奴が、のうのうと存在している事が、腹立たしくてならない。見つけ次第、何が何でも潰してやろうと、仲間と相談して一生懸命情報収集をしてきた。彼を使用しているかもしれない機体を探していたはずだが、これはこれで好都合だ。

それなのに、カヤは今になって憎んでないと言う。だから何もしなくていいと。

「カヤ、どうして」

アスナは小さく呟く。

一番恨んでいるはずの、傷ついているはずの彼女がそう言うのだ。どうしていいか分からない。

暗闇の中、床に座り込んだまま膝に顔をうずめた。

「行かないで、お願いだから」

アスナが懇願するが、彼は困ったように笑っただけだった。

「戦ったって、殺されるかもしれないじゃない」

「そう、かもな」

「かもなって、どういうことよ。あんたが死んじやったら、そしたら、カヤはどうなるの。たった二人の家族じゃない」

「もしそうなら、カヤのこと、頼む」

「勝手な事言わないでよ！」

あつさり言つてのけた彼に、当たるように怒鳴った。腹が立って、悲しくなって、心の中がぐちゃぐちゃでわけが分からない、その全てをぶつける。

だけど、彼の決心は固かった。

「おれが帰らなかったら、アスナがカヤの家族になつてくれ」

「……いや。嫌だ、そんなの。カヤの家族は、あんたなんだよ。その場所が私につとまるわけじゃないじゃない」

「出来るよ、だって、ずっとおれらと一緒にいただろ」

「できない」

「大丈夫だ。頼むよ、こんなこと言えるの、おまえしかいないんだ」彼の頼みは、ちゃんと聞いてやりたい。受け入れてあげたい。いつもそう思っているのに、それなのに、こんなことを言っただけはなかった。受け入れる事は、彼の死の可能性を認めることを意味する。嫌だった。死んでほしくなかった。

アスナは、力なく首を横に振る。

「もう、いいじゃない。一緒にいようよ。せめて、カヤの手は繋いでいてあげて」

「おれも、できればそうしていたい」

「だったら」

「でも、出来ないんだ。行かないといけない」

どうしても、聞いてくれそうにない。それに、時間も残っていない。悲しくて悲しくて、涙が滲む。

「どうして。カヤのこと、嫌いな。兄妹じゃない」

「嫌いなわけないだろ。カヤが傷つくのを見るのが、おれが一番辛

い。耐えられない」

だから、と彼は笑う。いつもと変わらない、優しい笑顔で。

「だから、戦うんだ」

我慢できなくなったアスナの目から、涙が零れた。慌てて拭おうとするが後から後からそれは溢れてきて、ごまかすのは諦めた。

彼は、自分達と同じように、まだ子どもだ。その彼がこんなことを言っているのが、悲しかった。それ以上に、彼にそれを言わせているものが、限りなく憎い。守るために命を懸けさせる何かが、例えようもなく憎らしい。

「そんな顔すんなよ」

笑って、彼は泣いているアスナの背を軽く叩いた。一番、辛く怖い思いで一杯なはずの彼は、笑っていた。

「また、会えるよ。な、大丈夫だから。また三人で遊べる日が、きっと来るから」

それを、平和というのだろうか。平和な世界だというのだろうか。もし、もしも戦争が終われば、再びそんな日が来るのだろうか。

それとも彼が言っているのは、会えると言っている場所は、ここではないのだろうか。

うんうんと頷きながら、「わかったよ」と返事をして必死でアスナは涙を拭う。いつもの強がりではない、きつと最後になるであろう彼の姿を滲ませるのが、嫌だった。

そしてその日、彼はいなくなった。敵兵にやられたという証言だけが残され、死んだという証拠はなく、目の前からいなくなってしまうった。

戦争は終わらない。

あの戦闘兵器が一度死んだとき、最後に耳にした言葉。「カヤ」という単語。そいつはあの場所で、彼と同じ場所で死んだ。あいつ

が、殺したんだ。

最後の最後まで、彼はたった一人の家族を想っていたのだ。それなのに、そんなに優しい人なのに、どうして殺されなきゃならなかったんだ。まだ子どもだったのに、自分と変わらないのに、まだ未来を信じて笑っていい頃だったのに。彼は自分で戦う事を望んだ。優しい彼は、望まざるをえなかった。

こんな思い、もう嫌だ。この国も、戦争も、何もかもが嫌だ。

「ごめんね」

小さく呟き、アスナはカヤの柔らかい髪に触れる。

やっぱり、私は行くよ。こんなの理不尽だ。奪われてばかりで、カヤもたくさん泣かされた。なにも悪いことなんてしていないのに、きつと、こうしなきゃ何も変わらない。私はもう、前に進めない。許せない。

穏やかな寝息を聞きながら、少女をそっと抱きしめた。窓から差し込む柔らかい月明かりが、アスナの流した涙を、そっと照らしていた。

chapter 5 - 1

遠くで響いた爆発音。

音の真上で、雲が燃えていく。

雲から涙は降ってこない。

降ってこないから、燃え続ける。

燃え続けるのに、立ち込めるのは静寂。

誰かが呼びかける、誰かの名前。

名前の後で、燃え盛る赤い炎。

炎を消した雨の元で、聞こえる泣き声。

ああ、そうだ、あの泣き声は。

朝方、大きな爆発が起きた。

朝霧のなか、粉塵が舞い上がり、炎が薄い雲を染めた。

アスナは、向けられている銃口を精一杯睨みつける。大通りの固い地面に膝をつき、無駄だと分かっているが、顔を上げ続ける。

通りがかりは遠巻きに見ているだけで、助けようとする者は一人もいない。当たり前のことだが。

「重罪だと知って、やったんだな。人型戦闘兵器の倉庫の爆破などというものを」

幾人かの軍人が、彼女の前に並んで向かい合い、銃を構えている。そのうちの一人、きつと彼らの上司である男が、問いかけた。

アスナは、黙ったまま彼から視線を離さない。外せば、あまりにも自分が惨めだったし、これ以上に抵抗する術も思いつかなかった。「おかげで二体が駄目になったらしいが、これは大きな痛手だ。何

故国を裏切る真似をしたんだ、ん？」

「裏切りなんかじゃない。元から信じてなんていない」
押し殺した声に出来る限りの憎しみを込める。

「そうかそうか。そういう見解もあるのか。市民がそう思うのなら、我々が何のために戦ってるのかも分からなくなるな」

「なら、戦わなければいいんだ。そうしたら、必要以上に誰かが死ぬ事もなくなるのに」

「なにを今更」

男は、蔑むような哀れむような目で、彼女を見下ろした。相対する瞳は、この状況を省みず、狼のように鋭い。

「そういえば、君らが望んでいるものがあつたようだが」

厳しく表情を縛り付けていた彼女の顔が、懐かしい名を聞き、一度だけはつと緩められる。最も望んでいた名前を、確かにアスナは耳にした。

「どこに……」

「使っていたのだがね、兵器として。だがもとと死に掛けていたものだ、負荷に耐え切れずすぐに駄目になったよ。意外と難しい技術なんだぞ、これは」

急激な怒りに、アスナは奥歯を噛み締めた。相手が誰であっても何であっても、彼を、彼の死を馬鹿にすることだけは、彼女にとって許されないことだった。彼に対して残酷すぎる。だが、自分ももう直ぐそっちにいく、それで許してくれと、彼女は胸中で語りかける。
「まあいい、どんな理由があろうと、どうせ処刑だ。今ここで行なっても何の問題もないだろう」

男の隣にいる兵士が、一歩踏み出した。アスナに向けられる、無機質な拳銃。

覚悟はしていた。だから、彼女は懸命に相手を睨み続ける。

周囲のざわめきも、すでに意識の内には入ってこない。

「見せしめだ」

「アスナ！」

高い子どもの声が、男のものに被る。

小さな隻腕の子どもが、人だかりから這い出して、アスナに駆け寄る。そのままの勢いで、血の繋がらない家族に抱きついた。

「カヤ！ どうして」

「いや、アスナ、死なないで。お願い、もう一人にしないで」

アスナに抱きつき、横にへたり込んだまま、カヤが懇願する。心の底からの言葉が、アスナの決心を大きく揺るがし、ないものにしていく。

「ごめんね、カヤ」

彼女の体温を感じ、涙に触れて、今まで無視していた後悔が、急速にアスナの心に湧き上がる。全力で自分を頼ってくれる彼女を思い、いくのが、唯一の心残りであり、巨大な心苦しさだった。しかし、それを差し引いてでもの決意だったはず。

それなのに、今になって、彼女の手を離したくなくなった。

自分の不甲斐なさ、自分勝手さを噛み締めるアスナを、カヤは潤んだ瞳で見上げる。

「アスナ、死んじゃうの」

答える代わりに、一度頷く。

「それなら私も、一緒にいる」

「カヤ……」

「一緒に、兄ちゃんのとこにいこう。もう、一人で待つのは、いやだよ」

言葉を失って、アスナは少女を見下ろした。

カヤの為の、敵討ちのはずだった。彼女が一番憎んでいるはずのものをなくそうと、努力してきたのだ。けど本当は、誰のためだったのだろう。自分が、彼を失った事実を見つめきれずに、こんな方向に向かつてごまかしていたのじゃないだろうか。全部、自分の為だったのだろうか。

「ごめんね、ごめんね」

彼とは、カヤを守ると約束したのに、結局は自分の死に彼女を巻

き込んでしまう。こんな台詞を言わせている。最大の悲しみを、自分が彼女に施そうとしているのだ。死んでほしくないのに。例えば、未来に暗闇しか見いだせなくても、誰もいなくなっても、カヤだけには生きていて欲しいのに。

アスナは、カヤを抱きしめる。強く、優しく。

せめてもの慰めに、そつと彼女を背中にかばう。

「どうして、あいつが」

息を切らしながら、セグは全力で人だかりへ駆けた。仲間の側まで来て、銃を向けられている彼女を見て、啞然と呟いた。

彼女が、国軍の主力になっている戦闘兵器を破壊しようとしたのだ。さいわい、ヨウは最終点検の為に戻っていなかったため、無事だった。今も隣で、指示を待っている。

「あの子は」

確かカヤと呼ばれていた子ども。その子が、彼女の背にかばわれている。あの子も殺されるのだろうか。

これはただのみせしめだ。あんなことをすればこうなりますよという、公衆の面前で罪人を処刑するという、民衆に歪んだ正義を押し付けるには恰好の手段。

まだ全てをよく飲み込めないまま、セグは前の方で銃を構える仲間を振り返った。機械のように無機質に、彼は相手を見据えている。その無感情さは、いつも見ている赤い瞳によく似ている気がした。

引き金に指がかかる。

赤い瞳に、それが映る。

人が、人をかばう姿。

乾いた発砲音がこだました。

空を向いた拳銃から、細い煙が立ち上り、虚空に消えていった。首に刃の突き刺さった身体から、命が消えていく。

「うそだろ……」

かすれた消え入りそうな声で、セグが呟いたが、その言葉は自身の耳にも入ってこなかった。

腕に映えた刃を味方から引き抜き、人型戦闘兵器はゆつくりと、返り血で汚れた顔を上げる。心のない瞳が、本来の味方たちを捉える。

「ど、どうなっているんだ」

これが見せしめであると宣言した男が、驚愕に満ちた声を発した。

「おい、セグ、なんだよこれ」

「わからねえ」

仲間に声をかけられるが、セグにも何も分からない。誰よりも呆然として、それを見ている。

「これ、あの異常があつたやつだろ」

「なにやってんだ、止める、今すぐ!」

誰かの呟きに、男が声を荒げた。

「ヨウ、止める、止まれ!」

セグは怒鳴った。どういふつもりなのかは知らないが、それ以上に対処方法が見つからない。

これで十分なはずだった。

「お、おい」

仲間が焦りを露にする。

ヨウは膝を折って屈むと、そこに落ちていたものを左手で拾い上げる。先ほど空を貫いた拳銃が、その手に握られている。

人型戦闘兵器に、銃器の使い方がプログラムされていないのは、

まさにこういう場合を想定しての事だった。戦う為の彼らが更に兵器などを使用すれば、あまりにも強すぎる。もし、ありえないことだが、もしも暴走が起きてしまった場合、だれにも止められなくなってしまうからだ。学習能力の中からも外されているから、見て覚えるということも不可能なはずだ。

インカムを使えば、空気を介さず、直接脳内に指令を下す事できる。出来る限り素早く、セグがそれを装着している間に、ヨウも行動を起こしていた。

左手に握った拳銃をずっと前へ向け、右手首を押し当てて固定する。両手で構えたほうが確実なはずなのに、手はだりりとたれたままだ。それに、基本的に彼らは咄嗟に右手が出るよう、つまり右利きであると設定されている。なのに何故左手に握っているんだ。セグは一瞬考えたが、今の状況を踏まえれば、そんなことどうでもいい。

引き金に、ロボットの指がかかった。

「Y3562-140、止めろ！ 止まれ！」

ビクリとその手が震え、ヨウはセグの方を振り向いた。引き金を引かずにはすんだが、動きは停止していない。正式名称を呼んだ上で、止まれと命じたはずなのに。

「撃て！」

男の声が乱雑に響き、銃声がとどろく。

人ならば完全に相手を息絶えさせる量の銃弾が、機械の体に集中する。

部品が弾け飛び、装甲が剥がれ落ち、折角直したばかりの足に穴が開く。殺人兵器の身体がよろめいたが、ほぼ骨組みだけになってしまった右足を踏ん張り、まだ立っている。

再び、引き金に指が。

「駄目だ、ヨウ、撃つな！」

またしてもその行動は制限され、銃弾の雨にさらされながら、ヨウは自分の担当者を振り向いた。

どうして、と光のない瞳が訴えている。その間にも、身体は崩れていく。

くぐもった呻き声が聞こえた。ヨウの後方にいたアスナの、流れ弾に貫かれた足から血が流れている。それでも、前に出ようとするカヤを、彼女はなんとか押しとどめている。

「かばってるのか」

セグは小さく呟いた。

アスナとカヤの前に立ち塞がり、彼らの死を遠ざけているのだろうか。しかしどうして、そんな命ぜられてもいないことを。このままでは、確実にやられるのに。

ただみせしめの為に一般人を殺す軍人と、その一般人を庇うロボット。どちらが人間なのか、もうセグには分からなかった。ただ、ヨウのしていることが間違っただけではないことだけは、確かだと思った。

じゃあ、どうして俺は止めるなんて言っているのだろう。止まれなんて言っているのだろう。あれが止まれば、彼女達は確実に死ぬのに。理不尽に傷つき続けた彼女達が、死ぬのだというのに。

それでも、セグは言わなければならない。彼は、悲しいことに軍人だった。

「Y3562-140、止まれ！」

叫ぶと同時に、一発に顔をかすられた機械の身体が地面にくずおれた。

あちこちから金属が覗いている。普段は人と区別のつかない身体だから、それがロボットであることが一層強く表されていた。

ぼろぼろだった。命があれば、何度死んでいるだろう。だがこれならまだ、修理も可能だ、頭への銃撃はなされていない。直され、きっと今度は脳の方も修正がなされ、より人間を失って人を殺し続けるだろう。

セグは急に、ヨウを撃ちたくなった。その頭をふっ飛ばし、人の脳を失わせ、二度と使えないようにしたかった。だが彼にはそれが

許されない。自然に銃を握ろうとする右手を抑えるのは、なかなか困難だった。

ひとときの静寂が訪れる。もはや制御不可能に陥っている人型戦闘兵器を前にし、誰もが銃を向けたまま命を惜しんでいる。

「動かない、のか」

隣にいる仲間が、ひとりごとのようにセグに訪ねた。その顔は酷くこわばっている。

「さあ、な。だけど、ヨウは、まだ」

殺人兵器の正面にいるひとりが、きつと自身でも予期していなかったような声を上げた。

名前に反応したのだろうか。機械の腕が地面を掴んでいる。ところどころにしか人工皮膚が残っていない腕を、地面に押し付ける。

あそこまで壊れれば、自己保全の為に無理に戦おうとはしなくなる。無理だ。これ以上動けば、崩れてしまう。

だが、ヨウは徐々に身を起こしていく。うつ伏せだったのが、持ち上がり、上体が起きる。部品が、その身体から幾つも幾つも転げ落ちていく。壊れながら、ロボットは立ち上がっていく。

「うおおあああ！」

そして、叫んだ。セグも初めて聞いた、Y3562-140の大声だった。

崩れかけながらも、ヨウは立ち上がった。

片頬が剥がれ中の機械が見えている、その姿は、凄惨だ。

「おまえは、いったい」

思わず呟いたセグの言葉は、インカムを通じて届いたようで、赤い瞳が彼の方を向いた。真っ直ぐに視線が交差する。

小さな家の、床は固めた土で出来ている。その暗い部屋の片隅に小さな子どもがしゃがみ込んでいる。右手の細い指で土を掻き、絵でも描いて遊んでいるようだ。その側には、茶色の薄汚れた中型の犬が伏せている。窓から差し込む光が、その犬と子どもを暖めている。

静かな、どこか懐かしいような光景だった。その小さな空間には、世界に蔓延^{はつ}る悲しさとか苦しさなどは入り込まない、穏やかさが満ちている。

静かで、時間の流れも感じない。

突然、外に繋がっている木の扉が、勢いよく開いた。

「シノ！」

叫びながら、長い黒髪の若い女が外から飛び込んでくる。

「よかった。ここにいた」

安堵を明確に表しながら、振り向いた子どもを一度抱きしめる。が、その身体からは焦燥が滲み出ている、慌しく彼女はその腕を離れた。犬がぴくりと耳を震わせ、凶暴な唸り声を上げた。

「いい、大丈夫だから、言う事きいてね」

側の壁の付け根に、穴が開いていた。そこに腕を差し込んで、中に入っていた壺や箱を取り出し、床においていく。

「ちよつとだけ、ここに入ってなさい。大丈夫だから」

空になった穴を指していった。不思議そうな顔をしながらも、シノと呼ばれた子どもは頷いて近づいていき、片足を入れながら振り向いた。

「あつ」

声を上げると同時に、犬が二度三度と吠え、開け放たれた扉から、外へ飛び出していった。

名残惜しそうにそれを見ながら、小さな穴に身体を納める。底が、

床よりほんの僅かばかり低く、狭い視界から部屋の様子が少しだけ見て取れる。

窓から、悲鳴が流れ込んできた。かん高い女の悲鳴だ。

男の怒鳴り声。一人や二人じゃない。大勢いる。

恐怖に満ちた叫び声に、怒りに彩られた大声。

たくさんの足音、物音。

そして、銃声。何度も何度も。断末魔の聲が上がる。

泣き声が聞こえる。銃声が響く。泣き声が止む。

不安を限りなく広げる喧騒。

途端、部屋の扉が蹴破られ、怒鳴り声と共に荒々しい足音がなだれ込んできた。

女が、穴を塞ぐように背を押し付け、座り込んでいる。よくは見えないが、男の太い声が隙間から転がってくる。言葉までは聞き取れないが、明らかに見下げている、声。

女がなにごとか叫んだ。逃げようとはしなかった。

銃声が響き、彼女の声が聞こえなくなる。一度、二度、三度。六度目で、細い身体がゆっくりと横へ傾き、動かなくなった。

穴の中へ、液体が流れ込んでくる。外の光に照らされるそれは、赤い。女の身体から流れてきた血が、穴の底を浸していった。狭すぎてもろくに体勢も変えられない子どもにも血は流れ、腕が、足が、自身のものでない血で赤く染まっていく。

子どもは、何も言わなかった。叫びも泣きもせず、座り込んだまま、ただじつと赤に染められる。

物の割れる音、落ちる音、野太い声。それらは一通り充満すると、嵐のように去っていった。

何も聞こえない。耳の痛くなるような静寂が、唐突に訪れる。

やがて、子どもはなんとか穴から這い出し、血だらけのまま、倒れている女を見下ろす。彼女は薄く目を開いているが、その胸にも足にも銃弾が突き刺さり、未だに細く血を流し続けている。

その側に、子どもがしゃがみ込み、顔を覗き込んだ。二度と自分

を抱きしめてくれない腕に、そつと触れた。その子は泣いてなどいない、全てがあまりにも唐突過ぎたのだ。

「おかあさん」

かすれた、細く小さな声で、女に呼びかける。だが、母親からの返事はない。

「おかあさん」

もう一度呟く。

女のにごった瞳が微かに動き、乾ききった唇が、僅かに震えた。

しかし、命をはって守った息子の姿すらもその瞳は映せず、自分を呼ぶ言葉へも、答える声は出ない。

轟音が静寂を引き裂き、奥の扉が、弾けとんだ。その中から、炎が飛び出す。敵兵は、火までかけていったらしい。炎はあつという間に、全てを包み込もうとその手を広げていく。

「にげよう」

子どもが、母親の手を掴み、引つ張った。しかし、いくら彼女の身体が細くても、引き摺って逃げるには、その子は幼すぎた。

視界が煙に覆われたし、景色が白みを帯びていく。出入り口までの短い距離を、少しずつ、精一杯子どもは詰めていく。

焼けた天井が崩れだし、あちこちの床に、炎が突き刺さった。

外へ繋がる扉が、火を帯びる。音を立てて燃えていく。目の前で焼けていくそれを、子どもはぼんやりと見つめる。

あと数歩進んでいたら自分を焼いていた炎。

緩慢に視線をめぐらせ、目に留まったのが、開けっ放しの窓。時間の問題だが、まだ焼けてはいない。逃げ場はもう、そこ一つしかない。

子どもは、母親を見下ろした。どんなに頑張っても、窓枠へ彼女を引き上げる力はなさそうだった。

「にげ、て」

かろつじて聞き取れる、かすれた声。

いやいやと子どもは首を横に振る。まだ命の繋がっている母親の

側に、膝をつく。

「いやだよ。一緒に、にげよう」

そうは言うが、彼女が自力で起き上がってくれなければ、どうすることもできない。

「おかあさん、大丈夫だって、言っただよ」

その声が、湿っていく。その子は、このままではもう死ぬしかない自分達を悟ったのだ。炎に吞まれる恐怖や悲しみに支配され、その目に涙が滲んでいく。

炎の塊が、崩れる家の破片が、落下する。

子どもが、声を上げた。その腕をかすめて落ちた破片が、側に落ちていく。破片から突き出た釘の先に、鮮血が纏わりついている。

血の流れる右手首を押さえながら、尚も母親に取りすがる。

「……おねが、逃、げ」

弱々しい声が、訴える。女の口の端から血が垂れていき、炎に照らされる肌は血の気を失い真っ白になっている。とつくに、身体が限界を迎えているのは明らかだった。我が子を逃がそうとする気力だけが、かろうじて彼女に声を出させていた。

「いやだよ。ぼくも一緒にいる」

「逃げ、なさい」

「いやあ。おかあさんが死ぬんなら、ぼくも死ぬ」

子どもらしい大きな黒い瞳から、ぼろぼろと涙が溢れた。死を望んでいる子どもが、泣いていた。

「逃げなさい！」

はつと息を詰まらせると、同時に涙も止まった。潤んだ目を見開いて、母親を見下ろす。相変わらず、その瞳は自分を見てくれない、何も映っていない。

だが、一生懸命、その子は首を振って食い下がる。

「なにしてるの、早く、行きなさい」

「でも……」

「早く！」

気圧され、子どもは立ち上がった。窓の方へ向かいながらも、視線は外さないままだ。低い窓枠に手をかけて、尚、足を止めて迷っている。その目から、涙が零れる。

再び急かされ、枠をよじ登り、外へ出た。

背後で大きな音がして、振り返る。

炎の塊が落下し、母親の姿が見えなくなるところだった。

「おかあさん！」

絶叫し、家の中に身を乗り出す。だが、吹き上がる炎に、思わず身を引いた。

目の前で、全てを、炎が包み込んだ。

小さな村の、どの家屋も燃えていて、あちこちに血だらけの死体が転がっている。ある者は頭を飛ばされ、ある者は身体中に銃弾を埋め込んで。

足跡のついたやけに平たい赤ん坊が転がっている。炎に半身を突っ込んだままの若い男がいる。頭部から血を流している老婆が、壁にもたれかかっている。白い壁に、まるで赤い花でも描いたかのような模様。誰一人として息をしていない。

火が空気を焼き、天を焦がす音だけが、空気を震わせていた。全てが、炎と血で赤く染められていた。命のない地を歩く微かな足音も、死を運ぶ業火の音にかき消される。

彷徨する、煤で黒く汚れた小さな足が、ふと止まった。側に倒れている男の死体を、子どもはじっと眺める。それは、背を真っ赤にし、右手を精一杯前に伸ばしたまま、うつ伏せで地に伏している。

その手の先へ、視線を移した。

ふらふらと子どもが近寄っていく乾いた地に、少女が転がっていた。胸を真っ赤に染めた左腕に、誰かを強く抱きしめている。見下ろしている子どもよりも大きく、少女よりも小さな少年。彼女が庇

った事は一目瞭然だが、彼のこめかみからも赤い線が引かれており、身体はぴくりとも動かなかった。

彼女の手から零れた血が、地面に血溜まりを作っている。これ以上ない、酷い傷だ。なんせ、その手首から先はないのだ。

やがて、子どもはゆっくりと顔を上げ、少し離れた場所に飛んでいる手首の元へ足を向けた。細く綺麗な指をした右手。近くに跪き、自分の右手を伸ばして拾おうとする。

だけど、どうしてだか拾えない。触れられても、手は、指は、動かない。掴む事が出来ないようだった。

仕方なく、左手で少女の右手を持ち上げ、握り締めたまま持ち主の元へ戻った。垂れ下がった右手首の端に千切れた手を押し当て、元の形を作る。だが、手を離すとすぐにそれは転がって、別のものになってしまう。

繋がらない手を何とか繋げようと、しばらく頑張っていたが、やがて、子どもはその手を彼女の右腕の側に置いた。元の位置に出来るだけ近づくように、そっと置いた。

やがて、炎は消えた。

今にも雨が降りだしそうな灰色の空の真下、くすぶる瓦礫の上に、子どもは膝をついた。

側には、茶色い薄汚れた犬が横たわっている。むきだした歯茎から伸びる牙には、小さな穴の隙間から見た軍服と同じ、群青色の布が突き刺さったままだ。荒々しい獣の目が見開かれているが、その潰れた腹には必要以上の銃弾が撃ち込まれ、足跡が泥になって毛にこびりついている。

戦った。この犬は、戦ったのだ。敵を噛み千切り、撃たれ、踏み潰されたのだ。

汚れた細い腕を回し、冷たいはずの犬をその子は抱きしめる。――

人と一匹についた血と煤と泥が、互いを汚す。それでも、小さな体には余る犬を抱きしめ、しなやかさを失い硬くなった毛皮に顔を埋めた。

ぽつりぽつりと、水滴が地を打ち出した頃、ようやく顔を上げた。その雨は、まるで、無慈悲で無関心なカミサマとかいうものが、見たくない穢れを洗い流してしまおうとしているようだ。ひとりぼっちの命など、その崇高な目には、見えていないようだった。

だから、その泣き声もきつと聞こえてなどいないのだろう。

動かない犬を抱きしめたまま、天を仰いでその子は泣いた。それしか出来る事はないのだというように。それでも、絶望的な悲しみをせめて代弁しようという泣き声さえ、激しさを増す雨音にかき消されていく。涙さえ、雨に混じって頬を伝っていく。だれにも届かない。だれも、抱きしめてはくれない。温かさなど、どこにも存在しない。

雨は、降り続ける。

赤い瞳が、一瞬で全てを覚えてくれた。彼の持っている記憶を、全て伝えてくれた。

そうか、そうだったんだな。セグは声に出さずに呟いた。

あの子は、一瞬で何もかもを失ってしまった。家族も故郷も未来も。後に、子どもは自国の軍に拾われた。未来など、あるはずはない。年相応に愛してくれる人も、いるわけがない。

子どもは少年になり、同時に少年兵になり、人を殺しだした。右手の使えない彼は、手首を押し当てる銃を固定する技術を、習得しなければならなかった。そして、まだセグよりも若い頃、自分より僅かばかり年下の敵国の少年を、銃で撃ち殺した。だが、殺せたと思っていた瀕死の少年に、背を刺され、致命傷を負い、地に伏したのだ。消え行く意識の中、死という絶対的な恐怖の中、少年が自身の妹を呼ぶ声を聞きながら、彼は目を閉じた。

それで、死ねていたはずだった。もう、人を殺すことも、孤独に耐えて息をする必要も無いはずだった。永遠の安寧を得る為には、十分すぎる代価を彼は支払っていた。

それなのに。この国で、この時代で死んだばかりに、都合よく彼は再利用された。自分から全てを奪い去った者たちに引きずり込まれ、かつての仲間を、半永久的に殺し続けるという不条理を与えられて。

ひどいよな。こんなの、ひどすぎる。セグの目に、ぼろぼろになって銃を構える姿が映し出される。

「ヨウじゃない」

彼が呟く。

「おれは、シノだ」

そのひとことが、空気を介するよりも確実に、インカムから伝わってくる。ヨウの声で、シノが自身を示している。

セグは思う。あの子どもは、自分よりもたくさんのものを失い、たくさん戦場に赴き、たくさん人を殺し、大人になりきれずに死んだ。どうして、あの子が、こんなことをしなければならぬのだ。雨に打たれながら、動かない犬を抱きしめて泣いていた子が。あんなに弱くて、傷ついていた子どもが。今どうして、機械の体で、銃を構えているのだろうか。

「どうして……」

ひとりごとの端から、自身でも気付かない涙が一筋だけ、セグの頬を滑った。

一度だけ、一瞬だけ、シノの記憶の中で見たものが蘇る。明るいきちた村を、家族が歩いている情景。

小さな兄弟が跳ね回り、父親と笑いながらふざけあっている。側で、兄弟の姉が、呆れながらも笑っている。後ろについて歩きながら、幸せそうに微笑んでいる母親。そして、彼らの周りを駆け回る人懐っこい茶色の犬。

どこにでもありそうだが、なにものにも代えがたい幸せ。もう二度とあり得ない幸せ。

どうして、そんな小さな幸せが存在できないのか。理不尽に奪われてしまうのか。

何故、あんなに小さな子どもが、母親と共に死ぬことを望まなければいけなかったのか。炎に包まれ、焼け死んでいたほうがまだよかったなどと、思わせるのか。

そう考えると、今現在、彼が銃を構えているのは、セグには当たり前のように思われる。自分達は、今までどれだけの未来を奪ってきたのだろうか。死を奪ってきたのだろうか。それならば、彼に世界の不条理を代弁してもらって、殺されるべきなんじゃないだろうか。こんな技術を作り出した自分たちが死ぬのは、当たり前なんじゃないだろうか。せめて死んで許しを請うべきじゃないか。

そう思った。

セグは確かに、そう思った。

だけど彼は、悲しいことに、軍人だった。

「ごめんな。……シノ、ごめんな」

せめてもの、到底吊り合うはずのない謝罪を、心から。

そして、いつもの言葉を口にする。

「Y3562-140。止まれ」

直接脳に響いたそれは、彼の動きを全力で制御し始める。

シノは、引き金を引けなかった。ヨウが、彼を縛り付けるものが、許さなかった。

罪悪感だろうか、もしそうだとしたら、それを通り越すほどの何かで、白く澄んでしまったセグの中に、言葉がこだまする。

「どうして」

赤い瞳が、こちらを捉えていた。不思議そうな顔に奥歯を噛み締め、言葉を噛み締める。かろうじて絞り出した声が、最後の問いかけになった。

「おまえは、シノは、どうしたいんだ」

彼が望むもの。全てを奪われた子どもが。人を殺し殺された少年が。かつての仲間を殺し続ける殺人兵器が。ヨウが、そしてシノが、誰にも知られなかった心を、告げた。

人など、殺したくなかった。殺されたくなかった。奪われなくなかった。奪いたくなかった。

願いは、ただ、ひとつだけ。

「かえりたい」

全てがあつた、温かい全てがあつた、あの場所へ。裕福ではなかったかもしれないが、幸せだった、小さな世界へ。

ひとつの銃弾が、こめかみを正確に打ち抜いた。

赤い血が、空中へ飛散した。

小さな音を立てて、機械の体が倒れていった。

「大丈夫だ、しっかりしろ！」

「何やってんだ、医者いねえのか、医者！」

大声が響きだし、血を流すアスナの元に、人だかりが発生する。彼女の仲間、それに同意する取り巻きたちが集まりだしたのだ。彼女に近づけなくなったカヤの目にも、見知った顔が映りこみ、口々に何か話しかけてくる。

アスナは大丈夫みたいだ、もうすぐ病院に連れて行ってもらえる。そう確信を持ったカヤは、人垣を抜け出した。

「危ない、こっちに戻りなさい」

後ろから聞きなれた声が聞こえてくるが、カヤは返事をせずに、彼らから離れていく。

人間である彼女たちには、口々に声をかけて心配してくれる人たちがいる。不安げな目で見つめ、励ましてくれる人がいる。だからカヤは、そこを離れた。

誰も心配してくれない、近づいてもくれない彼の側に、膝をつく。機械にはありえないはずの赤い血が流れている。唯一残された人間の脳が、鉛玉によつて的確に貫かれたのだ。固い地面に押し付けた側頭部から流れるそれが、じわじわと広がっていつている。虚ろな赤い目は、うつすらと開かれたままだった。

カヤは、そつとその頬に触れた。体温維持装置などつくに壊れてしまった肌は、驚くほど冷たい。何故立っていられたのか不思議なほど、その体は崩れかけていて、人間離れしている。

未だに固く拳銃を握り締めている手の指を、一本一本広げると、彼女はそれを手から離してやった。

「もう、こんなもの、いらないよ」

少し離れたところに置きながら話しかける。返事はない。

ぽたりと、硬い頬の上に、雫が落ちた。「ごめんね」とそれを拭い、彼女は涙を零す自分の目に袖を当てる。

血を流す頭が僅かに動き、不思議そうに、泣いているカヤを見上げた。

「ありがとう」

彼女は優しく、その腕に触れる。

滲んだ景色の向こう、微かに彼が笑ったような気がした。
ゆっくり閉じられた瞼は、二度と開く事はなかった。

epilogue

「おい、それ、それ降ろしてくれや」

「これか」

「違う、右のやつだ、右」

「ああこつちか」

言いながら、セグは店先の棚の上へと手を伸ばし、抱えるほどの箱を引っ張り出す。想像以上に重い。足に落とせば指の一本や二本折れるんじゃないかと思いながら、慎重に床に降ろした。

はあと溜め息をつく彼に、修理屋が声をかける。

「軍部つーのは、解体されるのか」

「それが問題なんだ。進行形でめちゃうちやもめてる」

元々、人型戦闘兵器を製造する事への反感は募っていた。軍事国家ということとで水面下に潜められていたそれらが、ついに水上へ溢れ出してきたのだ。市民を取り締まるというみせしめが、結局こんな形へひっくり返され、軍部の存続から見直されている。

「ロボットが使えないんじゃないし、勝ち目なんてないし、白旗でも振るのかな」

その危険性が国中に広がり、国民の信用も得られなくなってしまった。いくら軍事国家とはいえ、国は人が集まって成り立っている。人型戦闘兵器の製造はストップされ、復興の用途は今後一切たっていない。

もしかしたら、この戦争から手を退くのもかもしれないことは、子どもでも想像に難くなかった。

そうすれば、この国がいったいどうなってしまうのかは、誰にも分らないが、これ以上の殊勝な選択はないはずだ。

「なんだこれ、異常に数多くねえか」

戸棚に分けられて入っている部品を眺め、セグが目を見張る。一種の部品の数だけが、他のものの三倍はありそうだ。

「阿呆。よく見ろ」

呆れた声に、紙がはられている部品を一つ指でつまみ、書かれている文字を読んでいく。すぐに、なるほどと納得した。

「一個だけ、もらっていいか」

「欲しけりや全部やる。どうせ、溶かしてつくり変えるだけだからな」

「いいよ、一個で。……いや、二個。俺失くしそうだしな」

自分の性格は、自分がよく知っている。だから、セグはもうひとつだけそれを取り出して、棚を閉めた。

あるときどうして、ヨウは。いやシノは、二人を庇ったのか。似ていたのだ。母親が自分を背にかばったときと、彼女、アスナが力ヤを守っていた姿が。つまり、人が人を守ろうとする姿。そう簡単には死ねなくなった彼は、今度は自分を守ろうとしたんじゃないだろうか。セグはそう思う。

他の理由があるのかもしれないが、今はもう知る術はない。

修理屋には、その考察まで告げた。そして、あるとき教えられた記憶を、誰よりも細かく伝えておいた。死んだ人間は誰かの記憶の中でしか生きられない、もう一人ぐらい、彼のことを知っていてもいいんじゃないかと思ったのだ。

期待通り、セグの考えを馬鹿にすることもなく、言ったことをそのまま受け止めてくれた。

「お前は、これからどうするんだ」

「どうすっかなあ。本気で解体ってことになったらどうなんだろうなまあ、そんなときやどうにかなるだろう」

極めて楽観的に笑いながら言った。今は、この気楽さが重要なのだ。「帰ろうかな、一度だけ」

「帰れ帰れ、そんで殴られてこい」

予想外の言葉に、彼の方を振り向いた修理屋は、にやりとしながら言った。「殴られたくはねえよ」少々照れくさそうに、セグは答える。

かえりたいと言った者に、帰る場所はなかった。それなのに自分はどうか、帰る場所があるのに、それを望まれているのに、帰ってやらないということは。だから、帰るということは、自分がなによりも先にしなければならぬ事のように思える。

続いていた曇り空が嘘のように、今日の空は高い。青々とした空色が、どこまでも広がっている。

視線を外すと、通りの向こうに、茶色の髪をした女が、少女と並んで歩いているのが見える。嬉しそうに少女は、何かを語りかけていた。その頭を愛おしそうに、女が撫でている。

雲ひとつない空の下、人のつくる声が、温かさが、惜しみなく溢れていた。自分の故郷にもこの空が広がっているのだろうか、セグはどこか安心感を覚えながら見上げる。

この争いで、たくさんの人が傷つき、途方もない悲しみと憎しみを抱いている。それら全てがなくなるまで、どれだけの時が必要なのだろう。いや、完全に消滅する日なんて、来るのだろうか。

雨は、全ての人に降り注ぐ。時期や量は違えど、誰しも必然的にその冷たい雨を浴びていく。ぬかるんだ地面も、すぐには乾かない。だが、雨はいつか止む。晴れ間が訪れ、日差しがその身を温める日は必ずやって来る。この空は、そうしてやってきた青空。六十年振りに訪れた、晴れ間のようだった。

国境も、時代すらも越える空は、そこに広がっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2545c/>

arme

2010年10月11日03時15分発行